

エボルトの力を貰って転生したから暗躍する（仮題）

通りすがりの錬金術師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様のミスで死んだ男がエボルトの力とビルドに出てくるアイテムを作れる力を貰って転生

だけど何故か性別が女になっていた

思い浮かんだから書いてみた、見切り発車なので設定ガバガバかも感想、評価お待ちしています。書くのがそんなに得意でないので文がおかしいところあるかも知れませんが、その時は教えてくれるとありがたいです。

目次

空白期の2	115
空白期の1	111
A, s 12話	107
A, s 11話	101
A, s 10話	94
A, s 9話	90
A, s 8話	85
A, s 7話	82
A, s 6話	78
A, s 5話	74
A, s 4話	68
A, s 3話	62
A, s 2話	57
A, s 1話	51
9話	45
8話	37
7話	32
6話	26
5話	21
4話	16
3話	11
2話	7
1話	3
プロローグ	1

プロローグ

(主人公side)

どうも、私の名前は『蛇野 香帆(へびの かほ)』といいます、性別は女です。

ええ、古典のように『ほ』を『お』と読めば『蛇の顔』になるんですよ。

唐突ですが私は転生者というやつですね。

テンプレのごとく、トラックが突っ込んできて死んだんですが、そのあとに神様を名乗る人と会い、自分のミスで間違えて死なせてしまった、と言われたんですよ。

ふざけてますね。

それでお詫びとしていくつか特典をくれるとのこと。

ちなみに前世の私は男でした。

当時、悪役というものに憧れていたのでそれを伝えると仮面ライダービルドに出てくるエボルトの力&使用アイテムと、ビルドに出てくるアイテムをデバイスとして作れる力、それと神様特性のサポート用のミッド式デバイスをくれるとのこと

はい、ミッド式デバイスという単語が出たことで転生先がわかりましたよね。

リリカルなのはです。

あの白い魔王やら死神やら歩く危険物やらが出てくるあれです。

それで転生したはいいんですが女になっていたのは驚きましたね、ええ。

それとどうやら私の転生先の世界には他にも転生者がいるとか

正義の味方的なのがいるらしいので悪役プレイが進むからいいかなー、とか思っていたのが懐かしいです。

え？今ですか？

……まあ、実際に見るとかなりウザかったですね、どこがとはいいませんが。

後は俺様最強！みたいな銀髪オッドアイのテンプレ転生者くんも

いましたし……なんか原作キャラだけじゃなくて可愛い子（私含む）を皆、嫁とか言い出して女子たちから嫌われてますがね。

ちなみにこの2人はお互いを転生者と認識してるようですが私も転生者だということはバレてません。

だつて原作キャラと必要最低限しか関わってない（同じクラスなのに）ですし、魔力はロックフルボトルの力で自己封印して隠してますからね。

あと前世は男と言いましたが今の口調は性別に合わせましたよ。

一人称が俺の女子はいないこともないでしょうがほとんどみないのでね。

ちなみに親、は基本的に仕事で色々な世界を飛び回っているらしいので、家には私一人です。

家事は一通り出来ますので問題はありません。

貰ったデバイスの名前は『ベルナージュ』、愛称は『ベル』
待機形態はあの腕輪です。

入ってる魔法は変身魔法と隠蔽魔法、それと防御魔法くらいです
ね。

バリアジャケット？基本的にスタークやエボルで活動するので要らないと思いますまだ設定してません。

日常生活では消しゴムフルボトルの力で腕輪を隠してますのでまあバレないでしょう。

他にいつておくことは……ああ、あれです。

声を金○ボイスに変えられるようになってましたね、身バレしないの
でいいと思います。

それと文句いいたいのはやっぱり名前ですね。

スタークのせいだとは思いますが……蛇の顔……はい。

まあ、そんなこんなで今は私立聖祥大付属小学校に通ってる3年生
です。

さて、悪役としてどこまでやれますかね……フフフ。

1話

(香帆side)

さて、今日も学校です。

どうせまたやってるんでしょね……………

ガララ)

「ふむ、今日も可愛いな、嫁たちよ」

「ヒッ！」

「おい、やめてやれよ

皆が嫌がってるだろ！」

「はっ、何を言うか！

嫌がるわけないだろう、嫁たちはただ恥ずかしがってるだけだ」

いいえ、本心から嫌がってます。

とまあ、こんなやり取りが毎日です。

いわゆるテンプレ転生者である『王野 英雄(おうの ひでお)』と、正義の味方系転生者の『衛宮 剣太(えみや けんた)』の口喧嘩が頻繁にあります。

まあ、王野が女子に色々と言っててそれを衛宮が止めるというだけです。

衛宮がウザイ理由？謎にモテるし(※原作キャラ除く)前世の私よりイケメンだからですよ、ついでに鈍感。

ええ、ただの八つ当たりなのは認めますが男女両方の敵なのは変わらないでしょう？

まあ、こんな毎日を過ごしつつスタークの力を十全に使えるように特訓はしてますよ。

さて、そろそろ原作が始まるようです。

ええ、夕方と先ほど脳内に『助けて』と来ましたので。

助けに行かないのかって？嫌ですよ。

目的のためにジュエルシードを奪いには行きますけどね。

変身魔法で大人モードになり……

「では、」

《コブラ》

「蒸血」

《ミスト、マツチ》

《コ、コブラ……コブラ……ファイア!》

【ふう、ほんじゃあ行くとしますか】

で、現地に

ある程度離れたところから見えますが、ジュエルシードを取り込んだ化け物が王野と衛宮と戦ってますね。

その後ろではなのはちゃんが呪文を

「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！」

ふむ、やはり生変身はいいものです。

「ほう、流石は嫁だ」

「なのはは王野君の嫁じゃないの！」

「よし、なのは、隙を作るから封印してくれ」

そして衛宮が両手に出した黒白の剣を投げ化け物に刺さると同時に爆発。

「俺も特別に手を貸してやろう

ゲート・オブ・バビロン！」

空間に様々な武器が浮かびそれが化け物に刺さっていきます。

「リリカルマジカル！ジュエルシード封印！」

終わったみたいですね、では貰いにいきましょうか。

(なのはside)

昼間助けたフェレット、ユーノ君に助けを求められて魔法の存在を知って化け物と戦った。

王野君と衛宮君も出てきて、戦いだしたのにはユーノ君も驚いていた。

「とりあえずみなさんお疲れ様です

なのは、後はあれを回収したら終わりだよ、レイジングハートを近づけて」

「あ、うん！」

そういつて近づこうとしたんだけど……

『Master!何者かが来ます!気を付けて!』

「えっ!?!」

レイジングハートからいきなり言われて止まる。

【おうおう、なにやら御揃いのようで】

ジュエルシードのところに現れたのは蛇のような仮面や鎧に身を包んだ人。

「誰だ、貴様」

「何しにここに……」

【わ……んんっ!俺の名はブラッドスターク

スタークとでも蛇やろうとでも好きに呼んでくれ

あと目的はこの石ころだな】

そういつてスタークさんはジュエルシードを拾う。

「ジュエルシードは危険な物なんです!だから僕はそれを回収してるんです

返して下さい!」

【知ってるさ】

まあ、せいぜい俺が有効活用してやるよ】

「さて、悪いが行かせるわけにはいかない

それを返して貰おう」

そういつて衛宮君は両手に剣を持って突撃する。

【おいおい、相手との実力差くらい把握してくれよ】

「けどそれをスタークさんは素手？で軽々と受け止め、衛宮君を蹴り飛ばす。」

【弱すぎるな】

「ならばこれでも喰らうがよい、蛇」

「今度は王野君が槍や剣を飛ばす。」

【それならこれだ】

銃を取り出して刺さっているボトルを抜いてまた刺す。

《スチームブレイク・コブラ！》

その音と共に蛇みたいな弾が発射されて全てを撃ち落とす。

「何!？」

【邪魔だ】

そして王野君に近づき殴り飛ばす。

「グハッ!」

【さあて、お嬢さんは……と、これだな】

そういつて剣を取り出して

《デビルスチーム》

そこから煙が出てきて私を包んだ。

「ゲホッゲホッ」

『Master!』

【ほー、やっぱり意識を保てるか】

やっぱり?・

【これで今回の目的は達した、それじゃあなciao!】

そして煙に包まれたと思ったたらその場から消えていった

私はそのあとのことをよく覚えていない。

2話

(なのはside)

ブラッドスタークという人に謎のガスを浴びさせられたあと気づいたら家にいた。

ユーノ君や衛宮君に聞くと私は普通に家に帰っていったみたいなの。

あの人はまたジュエルシードを狙ってくるかもしれないから強くならなきゃと思った。

でもあの人はジュエルシードを1つとったあと全く出てこなかった。

あれから2つ回収して、今は友達のすずかちゃんの家でアリサちゃんとお茶会をしている。

もちろんユーノ君もつれて来てるけどすずかちゃんの猫と戯れてるの。

『助けて』と念話で言われたけど無視する。

と、ここで

『なのは！ジュエルシードだよ！』

『えっ!?!どうしよう……』

『僕が先に行くから追いかけてきて!』

『わかったの!』

ユーノ君を追いかけるからとアリサちゃんとすずかちゃんには待っててといいジュエルシードの元へ。

途中で念話を受け取っていたのか衛宮君と王野君も来たの。

そして現場にはとても大きくなった猫さんが……

「えーと……」

「どうやらこの猫の大きくなりたいてお願いをそのまま叶えたみたいだね……」

どうしよう、こんなかわいい猫さんを攻撃なんて出来ないよ……

そう思っているところから弾が飛んできたから慌てて避けた。弾が飛んできた方を見ると斧型のデバイスを持った金色の女の子と赤い槍を持った女の子の2人がいた。

金色の子は猫さんに、槍を持った子は私を素通りして衛宮君と王野君に突撃していった。

衛宮君たちの方が気になるけど金色の子がジュエルシールドを封印したのを見て渡さないために戦いを挑んだの。

(香帆 side)

なのはたちからジュエルシールドを横取りし、ついでにネビュラガスを浴びせてから起動してないジュエルシールドを2つほど回収、封印した。

その後は見てはいたが神社のも街中の大樹のも関わりはしなかった。

そして今も、ブラッドスタークに蒸血して、消しゴムフルボトルの力で姿を消して、フェイト vs なのはの戦いを見ている。

フェイト側にいた転生者のことも気になるし、実力的にはなのは側の転生者より上だが特に問題はない。

とまあ、なのはとフェイトの方は、おおむね原作通りになのはが劣勢である。

そしてフェイトがとどめをさそうとしたとき

「負けない……のー!」

なのはが咄嗟にレイジングハートからシューターを撃ち牽制、そして近づいて殴った。

これにはフェイトだけでなく私も驚いた。

まあ、その後疲労で倒れたので原作通りフェイトは、そのままジュエルシールドを回収して転生者と共に帰っていった。

【いいぞ、その調子だ、高町なのは……!】

いいものを見せて貰ったので今回はそのまま私は帰ることにした。

(剣太 side)

なのはとフェイトの初対面イベントにてフェイトのとなりに見たことない女の子がいた。

俺やとなりのこいつ（王野）と同じで転生者だろう。

この前のブラッドスタークと名乗ったやつも、恐らく転生者だと思われる。ただ、この前以降出てきてないので何をしたいのかよくわからない。

話は戻って、彼女の持つてる槍を解析したところ『貫き穿つ死翔の槍』だった。

ゲイボルクとはかなり厄介だな……

そして彼女は俺と王野に突っ込んできた。

「さあ私、クーが貴様たちの相手だ

楽しませてくれよ？」

戦闘狂かよ!?

「喧しい、消えよー!」

王野が剣を降らすのがクーと名乗った彼女は全てを槍で打ち払う。

「この程度か、つまらん」

「だったらこれはどうだ!」

干将と莫耶を複数投影して投げ、至近距離で爆破する。

「やったか!？」

「それはフラグというのだぞ」

煙の中から無傷の彼女が飛び出してくる。

「も少し技を磨くがよい」

そして槍で足払いをされバランスを崩したところを俺たちは蹴り飛ばされる。

「ふう

さて、あの子は……!？」

俺たちが倒れたのを見ると彼女は息をつき、雰囲気が変わる。そしてなのはたちを見ると驚いていた。

俺もチラッとそちらを見るとなのはがフェイトを殴っていた。

……原作と少し違うな

「……まあ、一応大丈夫みたいね

悪いけど、私はあの子がなんのためにあれを集めてるかは詳しく知らないけど、あの子の味方になると決めたからには敵となるなら、次からは容赦はしないからね」

ん？つまりこいつは原作知識ないのか？

「じゃあね」

そう言っただけ彼女はフェイトと共に帰っていった。

くそっ！もつと強くならねえと……

現時点のジュエルシード所持数

なのは陣営：2

フェイト陣営：2

香帆：3

3話

(香帆side)

さて、そろそろ高町なのはのハザードレベルを測るのと同時にプレミアのところに行くのでしょうか。

まあ、場所はわからないからフェイトと交渉でなんとかね……ジユエルシード3つもありやいけるでしょ。

さあ、温泉編スタートだ。

(なのはside)

アリサちゃんはずずかちゃんとなのはの家族みんな温泉旅行にきた。

そこに偶然、衛宮君と王野君たちも来てたの。

温泉出たあと知らない女の人にこれ以上関わると痛い目見ると言われた。

どこかであったことあるのかな？

そして夜、

ジユエルシードの反応があつたので行くと、そこにはこの前の金の女の子と槍の女の子、それと昼間の女の人がいた、ユーノ君いわく使い魔らしい。

封印は既に終わってたみたい。

私は前から思ってたことを金色の子に言う。

「ねえ、私と【ジユエルシードを賭けて戦って？てか？】え？」

声が出た方を見ると全身を黒い服に包み顔も隠した人が

でもこの声は！

「誰だい？」

「なんだ、お主

敵か？」

あの人たちの仲間じゃないの!?! てことはまた別のグループ!?!

あの人は銃を取り出しボトルをセットする。

《コブラ》

【蒸血】

《ミスト……マッチ!》

《コブラ……ファイア!》

やっぱり!

「ブラッドスターク……」

【俺はブラッドスターク、そちらのお三方お見知りおきを】

「何をしに来やがった!またジュエルシードか!」

衛宮君が武器を構えて聞いた。

【いいや?今回の目的は2つ

まずは高町なのは】

私なの!?

【お前のハザードレベルを測りにきた】

ハザードレベル?

【それと、その金色の】

「やはり敵か、貴様」

槍の女の子が構える、だけどあの人は両手を挙げて

【おいおい、早とちりはやめてくれ

俺はお前の上に用があるんだ

ここに3つのジュエルシードがある

これをやるから会わせてくれよ】

そう言っつていつの間にか手に持っていたジュエルシードを見せる。

「いつの間に3つも……」

「………わかった」

【交渉成立!ついでだ

高町なのはのハザードレベルを測ったあとは残りの奴らの相手してやるよ」

なにするかわかんないけどあの人にやられる訳にはいかないの！

先手必勝！

「デイベイン・バスター！」

【おっ？来るか？】

あの方は違うボトルを銃にさし引き金を引く。

《フルボトル！》

《スチームアタック！ダイヤモンド！》

煙が出たと思えばそこからダイヤモンドの盾が

……ダイヤモンド!?

【ほー、ハザードレベル2、3か

まあまあだな】

え、あれで測れたの!?!てかまあまあって……

【んじや、あいつらの相手するのでしょうか】

あ、勝手に帰ったらジュエルシード渡さねえからな?】

「わかってる、クー

その人と一緒にいてくれる?」

「あい、わかった

仕方ないな」

「それで?さつきは何を?」

あ、聞いてくれるんだ。

「うん、私とジュエルシードを賭けて戦って!」

「わかった」

そして戦ったけどまた負けちゃった。

ジュエルシードはとられちゃったし……

「あ、名前!名前教えて!」

私は高町なのは!あなたは?」

「……フェイト」

「フェイトちゃんね、またね！」
フェイトちゃんは返事せずにスタークさんとクーという人と使い魔の人と帰っていった。

(香帆 side)

さて、約束取り付けられたしこいつら早々に片付けて行くのでしょうか。

【ああ、お前は見てるだけでもいいぜ？

どうせ監視だろ？】

「ほう、やはりわかるか」

【当たり前だ、俺をなめるな】

まあ、私はどう見ても怪しいですしね。

「おい、おまえら2人も俺たちと同じなんだろ」

【ん？なんのことだ？】

衛宮が聞いてくるがとぼける。

「とぼけなくていい、何が目的だ？」

【聞かれて素直に言うと思うか？】

「うむ、答えたらただのバカだな」

「ならば吐かせるだけだ、ゆけ！」

王野がまた武器を降らしてくる。

【はあ、ワンパターンとかつままないぞ】

それを楽々と避ける、こんなのにスチームアタックなんて使う必要もない。

「だったらこれはどうだ！」

衛宮は突っ込んでくる、それも見事に王野の剣を避けつつ。

【なるほど、あいつの武器を避けた隙にお前が斬ると

いい考えだが、甘い！】

スチームブレードのバルブを回す。

《エレキスチーム！》

【ふん！】

「がつ！」

痺れさせて衛宮を戦闘不能にする。

【お前も眠ってる】

近づき、王野も気絶させる。

【これでいいだろ？クーとやら】

「ああ、ならフェイトと合流するぞ」

【ほいよ】

さて、あとはプレシアが話を聞いてくれるかですけど……

そして私たちは戦線離脱し

「じゃあ、私はここで

またね！」

「うん、ありがとうクー」

クーとやらと別れたあと……

【ほれ、約束のジュエルシードだ

ちゃんと連れてつてくれよ？】

「わかってる」

「なあ、フェイト

こいつほんとに大丈夫か？」

「わかんないけど、そういう取引だから……」

そうそう、ちゃんと契約は守らないとね。

「じゃあ、いくよっ！」

【ああ】

そしてプレシアの待つ時の庭園にワープする。

現在所持ジュエルシード

なのは陣営：1

フェイト陣営：7

香帆：0

4話

(香帆side)

さて、プレシアは話を聞いてくれるかな？

「あら、フェイト帰ってきたのね

ジュエルシードはどれだけ集まったの？」

「7個です……」

「そう……ならさつさと残りを集めてきなさい」

「はい……あと母さんに用がある人が来てるんだけど」

「なに？勝手に連れてきたの？」

「そうとも言えるし違うとも言えるな」

「ッ！誰!？」

【俺はブラッドスターク、あんたに用があつて来た

以後お見知りおきを】

「ふん、よろしくする気も話す気もないわ

失せなさい」

【俺があんたの望んでることを出来るとしてもか?!?】

……フェイト、今日はもう部屋で休んでなさい

私はこいつといくつか話すことがあるから」

「わかりました」

そしてフェイトは出ていく。

「で？さつきのはどういうことか聞かせなさい」

【オーケーオーケー

俺はな、ありとあらゆる物体を作り替えることが出来るんだ

それを使えば……そうだな、例えば足が動かないやつを動かせたり、別人になれたり、はたまた病気で眠ってるやつを完治させて目覚めさしたりな

ああ、もちろん害はないぜ？

どうだ？あんたの望んでること出来るだろ？」

「……そのようね、ただどこでそのことを知ったのかしら？」

【それは企業秘密だ】

さて、どうくるかな？

「いいわ、こつちよ

ついてきなさい」

【了解】

そしてプレシアの研究室へ

「ここよ、ほんとにアリシアを治せるのよね？」

【ああ、もちろん】

「そう、で？なにが望みの？」

【おや？やっぱり気付いていたか】

「当たり前じゃない、じやなきや態々来ないでしょう？」

【ははは、その通りだ】

俺の望みはただひとつ

今、地球でフェイトと同じくジュエルシードを集めている高町なのはという現地出身の魔導師がいる

そいつと敵として戦って強くしてくれればいい

ああ、フェイトに任せてもいいぜ？」

「それだけ？」

【ああ】

「そう、わかったわ」

【俺はアリシアを治す】

代わりにお前は高町を強くする

これで交渉成立でいいか？」

【ええ】

【ならこれから治療にはいる、終わるまで一人にして貰うぞ？】

「構わないわ、ただし……」

【わかってるさ、契約は守る主義なんだね】

そしてプレシアは出ていった。

さて、治すとは言ったけどあなたの望んでる通りとは言ってないからね、フフフ。

エボルトが葛城巧にやってみたみたいに記憶は消しますか。

プレシアには何10年も眠ってて記憶がおかしくなったとでも言えればいいかな。そうすれば結局ジュエルシードを集めてアルハザードを目指すだろうし……もちろんアリシアには色々あることないこと吹き込んで私の仲間として使うけどね？

で、とりあえず汚染されたリンカーコアや体組織を修復、記憶も消す。

その他諸々弄って……つと、いつのまにかかなりの時間が経ったのか……

まあいいや、さてお目覚めだよ？アリシア。

「うーん？ここは？」

【お目覚めかい？アリシア・テスタロッサ】

「アリ……シア？」

【ああ、お前の名前だぞ？覚えてないのか？】

「……（コクン）」

上手くいったな、なら後は……

と、まあ色々吹き込んだ、けっこういい感じに仕上がったね。

後プレシアの前では何も覚えてないふりをして私がサインを出すまで純粋なふりをしていると言っておいた。

さて、プレシアに報告といきますか。

【おーい、治療終わってアリシアが目覚めたぞー】

「ツ！ほんとなの！」

【ああ、だが問題があつてな……】

「アリシアっ！」

話を聞かないでプレシアは走っていった。

「アリシア、わかる？お母さんよ！」

「……誰？」

「え？」

【人の話を聞け、どうやら何10年も眠ってたせいか記憶が損傷してるみたいだな

流石にそこは俺でも治せん

まあ噂に聞くアルハザードなら……」

「それよー待っててアリシア、絶対に思い出させてあげるからね！」
そして部屋を飛び出していった。

うわあ、親バカ………

【じゃあ、アリシア

時が来たら………】

「うん、わかってるよ、スターク」

【で？アルハザードへのあてはあるのか？】

「ええ、元々はアルハザードへ行ってアリシアを目覚めさせる予定
だったけど、記憶を取り戻すためにそこへ向かうわ

それに使うのがジュエルシードよ

というかわかってたんじゃなかったの？」

【いや？俺はお前がアリシアを目覚めさせるためにジュエルシードを
集めてるといふ情報しか持ってなかったからな】

「そう、それで新たな取引といかないかしら？」

【お？なんだ信用してくれるのか、嬉しいねえ

内容は？】

「ジュエルシード集めるのを手伝ってほしいの

対価としてアリシア以外ならなんでも持ってっていいわ」

【ほー、太っ腹だな】

「ええ、アリシアを目覚めさせてくれた恩があるからね」

【わかった、ならその件はこちらで勝手にやらせて貰うがいいな？文
句は言うなよ？】

とりあえずフェイトにもネビユラガス撃ち込みますか。

で、翌日。

「フェイト、今日からこの人と一緒にジュエルシードを集めてらっ
しやい」

現地での指揮も彼に任せるから」

【よろしくな】

「……………はい」

【さて、まずは……………ああ、今からすることに反抗するなよ？特にその使い魔】

「アルフだよ！」

アルフの叫びを無視してスチームブレードのバルブをひねる。

《デビルスチーム！》

それをフェイトに

「あつ……………ぐつ」

『s i r、しつかり！』

「フェイト!?お前、何を！」

【落ち着け、特に害はない

これはネビュラガスっていうものだ

効果としてはただ潜在能力を少し引き出すくらいだ】

「はあはあ」

案の定スマッシュにならずにそのままだった。

【おっし、ビンゴーさあ、少し休んだら行くぜ?】

「チツ」

ははは、アルフに嫌われたかな？

まあ、いいけどさ。

無印は準備期間だし……………この先が楽しみだ。

5話

(香帆side)

ジュエルシードを探しに地球に戻ってきた私達。

「で?どうするんだい?」

【ん?とりあえずそれぞれで分担して探すしかないだろう】

「なんだい、考えがあるわけじゃないのかい」

【ああ、俺にはやらなきゃなんないこともあるからな

何かあつたら駆けつけるさ

それじゃあ、ciao】

トランスチームガンによる霧ワープで自宅に帰り元に戻る。

「あー、学校めんどくさい…………でも休んでたら怪しまれるし行きま
すか…………」

学校ではなのはとアリサが喧嘩をしてました。

これこのあとジュエルシードの発動あるやつじゃないですか…………

で、案の定

なのはvsフェイト戦が起こり

「話さないと伝わらないこともあるよ!」と、なのはがいいフェイトが
答えそうになったところで、アルフに「最優先はジュエルシードの回
収」だと言われて、フェイトはジュエルシードに向かっていく。

それをなのはが追いかけて同時にジュエルシードに2人のデバイス
がぶつかり、ヒビが入ると同時にジュエルシードから激しい閃光と衝
撃が…………

それを私は衛宮と王野と戦いながら見ていた。

【おうおう、これはヤバそうなおつた!】

「なら、そこをどけ!あのままじゃケガをするぞ!」

「チツ、失せろ!」

んなこと百も承知ですよ。

だから、こうします。

《フルボトル!》

《スチームアタック・ロック!》

ロックフルボトルをセットしたトランスチームガンでジュエルシードに向け撃つ。

弾が当たるとそれは鎖となりジュエルシードに巻き付き吸収される。

すると衝撃はおさまる。

「封印……されたのか?」

「ああ、とりあえずあれを回収して帰らせてもらうぜ?」

「ッ!させ……」

「それはこちらのセリフだ」

止めようとしてきた衛宮をクーが槍で吹き飛ばす。

フェイトがジュエルシードを回収したので私たちは撤退した。

クーも連れフェイトの確保している拠点へ

【これで8個目か、あちらが確か1個のはずだから残り12個だな】

【……そういえばフェイトはなんでこれを集めてるの?】

【母さんのため】

【そう、母親思いなんだね】

【やっぱり原作知識ないのか……】

【そういや、あんた】

【スタークっていったっけ?】

【ん?ああ、そうだが?】

【なんで、いつもその格好なの?】

【拠点でくらい脱げばいいのに……】

【俺は雇われだからな、素顔とか晒したくないんだよ】

【ふーん】

後、あの銃とかどういう仕組みなの?」

「あ、それは私も気になる」

「……………（チラツ）」

アルフは何も言っていないがこちらをチラチラと見ている。

「……………俺の作ったシステムだ、後は企業秘密」

「そう、わかったわ」

絶対信じてないね……………一応作れるから嘘ではないんだけど。

【とりあえず今日はここまでだな、フェイトはデバイス直すために休んでおけ】

「そうそう、どうせろくに休んでないんでしょ？」

「そんなことは……………」

「ない、とは言わせないわよ？」

【んじゃあ、c i a o】

そして数日後、

ジュエルシードが反応したので行くと木の化け物がいた

フェイトがそれに突っ込むがバリアを張っていて攻撃が通らない。

クーム槍やルーン魔術（デバイスにより魔法と誤認させている）で攻めるがバリアに阻まれたり、バリアを抜いてもすぐに修復される。

私も援護しようかと思っただけど、毎回のようにあいつらが来て戦うことに、

【はあー、そろそろ諦めて貰えないもんかね？】

「嫌だね、お前は絶対に倒す！」

「貴様は目障りだからな」

めんどくさいですね……………

まあ、返り討ちにするんですがね。

今までより強くなった感じはしたけどまだまだですね。

描写？特に書くことないのでスキップですよ（メタア

ジュエルシードの方はなのはとフェイトで封印が終わったようで

すね。

それでまた2人が戦おうとした時……

「そこまでだー!」

声が響いたので全員がそちらに注目する。

「こちらは時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ、全員戦闘を止めて話を聞かせてもらおうか」

『クー、逃げるよ』

スタークは……』

『わかったわ』

『足止めならやってやるよ、ジュエルシールドも可能ならとっていく』
捕まる訳にはいきませんしね。

念話が終わるとフェイトとクーはこの場から離脱する。

「ツ!待て!」

クロノがデバイスからシューターを撃ってくるが、私はそれをトランスチームガンで撃ち落とす。

【させるかよ】

「抵抗するなら公務執行妨害で拘束するぞ」

【悪いけどそいつは無理な相談だ、雇い主との契約もあるのでね】

「そうか、なら……」

クロノは構えるが2人が撤退した以上、私は戦う必要もないんですよね。

消しゴムフルボトルをトランスチームガンに装填して

《フルボトル!》

【これでもくらいな】

クロノはすぐ避けられるように構えるが

【……………なーんちゃって】

《スチームアタック・消しゴム!》

発射された煙に包まれ私の姿が透明になる。

「ツ!?どこにいった!?!」

感知出来るのか気になるので、そのまましばらく留まることに

「いない…….のか? まあいいとりあえずこれは回収させてもらう

それで、君たちは話を聞かせてもらえるかな?」

「は、はい!」

ふむ、魔法で姿を消してたのなら恐らくバレてたでしょうね。

やっぱりこれなら大丈夫なようですね。

。 ジュエルシードは回収されちゃいましたから、私も帰りましょうか

所持ジュエルシード

なのは陣営（アースラ含む）：2

フェイト陣営：8

6話

(香帆side)

この数日の間ジュエルシードを探してましたが一向に見つからず。それで私は今、時の庭園のプレシアの元に来ています。そこでフェイトが海のジュエルシードを強制発動させるのを見ています。

私のデバイスには飛行魔法ありませんし、ヘリコプターフルボトルで飛ぶのは少し見た目的に抵抗が……

というわけで私は今回待機です。

ちなみにクーも今日は用事があるとかで休みですね。

「全く、とつてこいも一人で出来ないなんて

使えない子ね……」

暴走した、6このジュエルシードを相手に苦戦してるフェイトをみて、プレシアが呟く。

そこになのは、ユーノ、衛宮が転送されて来た。

やっぱり所属したんですね。

でも、王野はどこに？

学校には、なのはたち共々来てないことから、協力してるのは間違いないでしょうけど……

まあ、とりあえず見ておきますか。

(なのはside)

クロノ君に連れられて時空管理局の船、アースラにいったあとジュエルシードの件で色々と話をした。

そこでクロノ君に無茶だと言われたけどやらなきや町が危なかった。

私たちの知ってる情報も伝えた。

スタークさんに謎のガスを浴びせられたといったら検査もしてくれたけど特に異常はなかった。

ハザードレベルというものも聞いたけど知らないみたい。

それで艦長のリンディさんに、協力してほしい、と言われてクロノ君が反対したけど正論で撃退されてた。

私とユーノ君、衛宮君は協力。

王野君はスタークさんが出たときだけ出ると

それからアースラの人たちと、ここ数日ジュエルシードを回収していて、あと残り6個になったの。

そして今、アースラで休んでると突如アラームがなったので行くとフェイトちゃんが一人で（アルフさんはいるけど）ジュエルシードを強制発動させていた。

魔力が尽きてやられそうだったので

「あの！フェイトちゃんを助けに行かせてください！」

そう言ったけど

「ダメだ、彼女がやられてからなら彼女とジュエルシードを両方確保出来る」

「でも！」

「なのはさん、残酷でしょうけどこれが現実です

あきらめてください」

『なのは』

『ユーノ君？』

『行って』

『でも、私の都合で迷惑はかけたくないよ…』

『僕がなのはが困ってるなら力になりたいだけだよ』

『ああ、なのは、あの子を助けに行くぞ！』

『ユーノ君、衛宮君…：うん！ありがとう！』

そして私と衛宮君、ユーノ君は転送ポートからフェイトちゃんの元へ

アルフさんに邪魔をするなど言われたけど、それを無視してフェイトちゃんの手助けをする。

ユーノ君がアルフさんに説明してる間に、私はフェイトちゃんに魔力を渡す。

そのあとは2人で仲良く封印
そして

「フェイトちゃん！友達になろう？」

そう言ったあと突如沢山の雷が降ってきてフェイトちゃんに直撃

「キヤアアア！」

「フェイトちゃん！」

助けにいったけど雷に弾かれたの。

アルフさんがフェイトちゃんを助けて、ジュエルシードもとうとうと
したけど、クロノ君が転送されてきて妨害した。

アルフさんに吹き飛ばされてたけど、ジュエルシードを3つ回収出
来たみたいなの。

仕方なく、残りの3つを回収してアルフさんは帰っていった。

(香帆 side)

【おうおう、派手にやったねえ

こんなことしてここがバレないのかい？】

「大丈夫よ、対策はしてるから」

【そうかい、あんたがそういうなら大丈夫なんだろう

じゃあ俺はアリシアの様子見てくるぜ、治療した者の責任として
な】

「わかったわ」

そしてアリシアの元に向かう途中フェイトたちとあった。

【お疲れさん】

「あんた！なんで助けに来なかった

どうせ見てたんだろ！」

【俺は飛べないんだよ……………】

そう言うとかかを察したのか

「あ……………なんだ、怒鳴って悪かったね」

素直に謝ってくれました。

別に怒ってませんよ、ええ

拗ねてるだけです。

【気にするな】

とりあえずそれだけ言って私はアリシアの元へ

終わってプレシアのところへ戻るとフェイトの方は原作通りプレシアに怒られ、アルフは反抗して逃げ出したと

【で？こちらの戦力が減ったが大丈夫なのか？】

残りは全て管理局が持つてるんだらう？】

「最悪これまでの11個でなんとかするわ

元々あれには期待してないもの」

【そうかい】

まあ、そろそろ終わりですかね。

せいぜい楽しんでくださいよ、プレシア・テスタロッサ？

(k u r s i d e)

どうも、クーこと遠坂 胡桃です。

偶然知り合ったフェイトちゃんって子とアルフとジュエルシードを集めてただけけど今日は用事で行けなかった。

それで終わって帰ってる途中だったんだけど、目の前にどこかで見たことある狼が傷だらけで倒れて……って、もしかして

「アルフ!?大丈夫!」

『あ……クーかい?フェイトを助けてくれ……』

そう言っって気を失いました。

「え?ちよつと、しっかりして!」

とそこで、

「ちよつと、その子ケガしてるじゃない!ねえあんた、何があったの!?!」

偶然通りかかったと思わしき高級車から、同い年くらいの女の子が私にもわからなくて

知り合いの飼ってる子なんだけど……」

「とりあえず治療のために私の家に連れて行くわよ

「あんたも乗りなさい、飼い主知ってるんでしょ」

「あ、うん！」

そのまま車に乗せて貰って

「あたしはアリサ、アリサ・バニングスよ

あんたは？」

「私は遠坂胡桃

クーって呼んで？」

「わかったわ、クー

でこの子のこと聞かせてくれる？」

ええと、魔法に触れない限りで説明すればいいんだよね。

「この子はアルフ、友達のカイトの……ペットだよ？」

「なんで疑問形なのよ、まあいいわ

その子の家は？」

………そういえば知らないね。

「ごめん、わからない……」

「そう、なら仕方ないわね」

で、アルフが心配だからと言ったら今日は泊まっていけと言われたので泊まることに

家には連絡いれてくれたとのことなので、安心して泊まります。

翌日、学校からすぐここに来ると、カイトと敵対してた魔導師の子が

「あ」

「どうしたのよ、なのは、クー」

「な、なんでもないよ、アリサちゃん」

「うん、どこかで見たことあるなーって思っただけだから」

『で？あなたたちは何しに？』

とりあえず念話で質問する

『アリサちゃんが大型の犬を拾ったって言ってたからもしかしてと
思ってた……』

『ん……クーとああ白い魔導師か』

『アルフ！起きたの？』

『良かった、あと名前はなのはだよ』

『そうか』

なあ、なのは、クー、フェイトをプレシアから助けられないか?』

『昨日も言ってたよね? どういうこと?』

『説明したいけどここでは……管理局のやつら聞いてるんだろ?』

全部話すから助けてくれよ』

『ちよっと待ってて』

なのはは管理局? と連絡をとってるみたい。

『ん、許可とれたよ』

『なら行こうかね』

クーはどうする?』

もちろん決まってるよ。

『私も行くよ、フェイトを守るって槍に誓ったから』

アリサに礼を言っておいてアルフやなのはと一緒に管理局の人たちのもと

ころ(アースラ)へ

そこでアルフに聞いたのは、

フェイトが母親のプレシアに虐待されていること。

プレシアが何かの目的のためにジュエルシードを集めさせている

こと。

スタークはプレシアと対話したあと正式に雇われた人だと言うこ

と。

プレシアに戦いを挑んだけど負けたこと、等

で、私も本来なら一応犯罪者であるフェイトの協力者ってことで、

逮捕って感じだったんだけど

何も聞かされてない&ジュエルシードを持つてるのはフェイト&

アルフの必死の弁護や、罪と呼べるものが特にない、ので見逃しても

らえることに

とりあえずプレシア許すまじ

槍の真名解放してやりましょうか?』

7話

(胡桃side)

アースラでの話が終わった後、衛宮剣太と名乗った子に呼ばれて2人で話をする事に

「で?なんのよう?」

「ああ、お前も俺や王野と同じで転生者だよな?」

「そうみたいだね、それが?」

「ならこの世界の原作についてどこまで知ってる?」

原作?ここってf a t eみたいになんかの創作物の世界なの?

「なんの世界なの?」

「魔法少女リリカルなのは、だ」

聞いたことあるようなないような……

「知らない」

「全くか?」

「うん」

「そうか……ならとりあえず今の辺りのことを教えようか?」

「いや、いいよ」

未来知ってても私たちがっていうイレギュラーいるし変わるでしょ?」

「確かにスタークってやつもいなかったしな……何かやつについて知ってることはないか?ああ、前世関連でな」

「うーん、わからない」

「そうだよな……」

ほんとにあいつ何者なんですか?

「なあ、俺を鍛えてくれないか?」

はい?

「いや、今のままじゃスタークどころかお前にも勝てそうにないからな……」

まあ、確かにそうだね

「わかった、影の国式ブートキャンプだね」

……せいぜい楽しませてくれよ?」
「嫌な予感しかしないがよろしく頼む」
まあ、ほんとの影の国には行けるわけないからとにかく戦い続ける
だけなんだけどね

(フエイトside)

アルフがいなくなつた
母さんがそう言ってきた

そして早くジュエルシードを集めてきても
スタークには別の仕事を任せているそうで今回も私一人の予定だ
早速地球に向かうと臨海公園にあの子、なのはの姿が
そこに行くよ

「フエイトちゃん、全てのジュエルシードを賭けて1vs1で勝負し
ようよ!」

お互いに全力全開で!」

なのはは10個のジュエルシードを見せてくる

私も11個のジュエルシードを見せて勝負の意思を示す

そして戦い始める私たち

なのはは初めて会った時はほんとの初心者だったのに、今では私に
追い付くくらいの強さになっている

私の動きにも対応してきているしシューターの制御も上手

お互いに一進一退できりが無い

このままじゃ勝つのは難しいと判断した私はバインドをかけて一
撃必殺を狙う

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きのもと撃
ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル。」

逃げられないと悟ったのかなのはは防御を固める

「フォトンランサー・フランクスシフト! 撃ち砕け、ファイアー!」
大量の魔力弾がなのはに襲いかかる

それによる爆発で煙も発生

「はあはあ、これで仕留めたはず……」

「ままだよ、フェイトちゃん！」

嘘………ほとんどキズがついてない………

「受けてみて、これがディバインバスターのバリエーション！」

そして彼女の杖先に大型の桃色と金色の混ざった魔力弾が……まさか収束魔法!?

「これが私の全開全壊!・スターライト・ブレイカー！」

その魔力弾には何層も重ねた防御魔法すら意味がなく直撃を受ける他なかった

そのあと落ちた私をなのはは助けてくれた

約束のためにジュエルシードをバルディッシュに出して貰ったとき

母さんの雷が落ちてきた

それにより11個のジュエルシードが母さんの元へ

そして管理局の人たちのところへ行くとアルフとクーがいた

「アルフ!クー!」

「フェイト!」

「良かった、無事だったんだねアルフ」

「こつちのセリフだよ!良かったよフェイト」

とりあえず私は着替えて手枷をつけられて部屋へ

そこにはモニターで母さんのところへ向かってる局員さんたちの映像が

「あのフェイトちゃん、私の部屋に……」

「ううん、見ておくよ」

『プレシア・テストアロツサ!ならばにブラッドスターク!時空管理法違反等の容疑で逮捕する!』

そして母さんの部屋に突入するとそこには母さんとスターク、そし

て私にそっくりな子がいた……………え？

皆が固まっている

『その子は…………』

『私のアリシアに近づかないで！』

【全く、俺は雇われただけだったのに…………】

そう言っつて母さんは電撃を放ち、スタークは銃を撃つ

それだけでかなりの人がやられる

「急いで全員撤退させて！」

「は、はい！」

『ダメね、11個だけじゃ確実じゃないけどやるしかないわ

この子の代わりに人形を娘扱いするのも大変だったわ』

えっ？

『聞いているかしら？あなたのことよフェイト

せつかくそっくりに作って記憶も渡したというのに…………』

「たしか、最初の事故でアリシア・テストロッサは亡くなったはず

…………』

『そうね、ただ仮死だったみたいだけどね

それをスタークは起こしてくれた

ただ記憶が壊れたようなのよ

クローンを作るときに記憶を渡しても生きてる人間には渡せない

からもうアルハザードしか私たちには残ってないのよ！』

そんな…………

『だからフェイト、もうアリシアの偽者のあなたはいらないわ

それに私はあなたのことが嫌いだったのよ』

そこで私の心は割れてしまったのだろう…………

(香帆side)

うわあ、やっぱりキツイですね…………

【かなりキツイの浴びせるじゃないか】

「ふん、あんな人形なんてどうでもいいのよ」

「母さん？」

「ああ、怖かったでしょ、アリシア」

大丈夫、もう終わるからね」

「うん！」

【さて、ほんじや契約はここまでだな？】

「そうね、アリシアを起こしてくれたことには感謝してるわ」

【ははっ、そいつはよかった

ついでだから最後まで見ていくが構わないよな？】

「ええ、好きにきなさい」

さて、そんじやあなのはとフェイトが来たら活動開始ですね

8話

(香帆side)

ふふふ、なのはと彼女によって立ち直ったフェイト達が攻めて来ましたね。

デバイスから投影されたモニターで見えますが、やっぱり二人のバスターは威力が高いですね……

魔力炉は封印され、プレシアはアリシアを庇いながらクロノと衛宮、王野、クーと戦闘中。

なのはとフェイトはプレシアの元へ移動中、と。

では、そろそろ行きますか。

で、ついた時にはフェイトがプレシアに啖呵をきっていた。

「私は、フェイト・テストロッサは貴女に産み出され、育てられた、貴女の娘です！」

「それがどうしたっていうのよ」

「だから私は貴女を守ります」

「私が貴女の娘だからじゃなくて、貴女が私の母さんだから！」

「……そう、だけどアリシアは大切な家族なの

なんとしても記憶を戻して幸せに暮らす

そのために私たちはアルハザードに行くのよ！」

【おうおう、流石は大魔導師プレシア・テストロッサだ】

「っ！ブラッドスターク……」

フェイトたちはいきなり現れた私に、警戒しました。

【プレシア、貰う報酬のことを伝えておこう】

「……アリシア以外ならなんでも好きに持っていけと言ったはずよ」

【ああ、俺が貰うのは実験体だ】

「実験体……フェイトのことかしら？物好きね」

いいえ？違いますよ。

「フェイトちゃんは渡さないよー！」

なのはたちが構えるが、

【いいや？フエイトじゃない

やれ、アリシア】

「はーい！」

「」「」「え？」「」「」

それに全員が呆ける。

アリシアは渡していたデバイスから、トランスチームガンとスチームブレード、ドラゴンフルボトルを取り出し、連結、バルブをひねった。

《ライフルモード！》《フルボトル！》

《デビルスチーム！》

それをプレシアに向かって撃つ。

するとプレシアの体が煙につつまれる。

「「なっ!?!」「」

「貴様……」

「お前、何をー」

煙がはれるとそこには妙にメカメカしい怪物、バースマツシユが「そんじゃあ、やっちゃえ！元母さん！」

【さあ、そいつを倒してみせろ、管理局の魔導師たち】

バースマツシユは魔導師たちに突っ込んでいく。

アリシアは私の隣にきて一緒に観戦します。

本来のバースマツシユは腕から炎を出しそれを操るが、素体がプレシアだからだろうか、炎だけでなく雷まで扱っている。

衛宮、王野、クロノ、クーが攻撃するが炎と雷に邪魔されて届かない。

「くそっ、なんだこいつー！」

「一体なんなんだ……」

「チツ、厄介よな」

なのはとフェイトはショックなのか動いてすらない。

【おいおい、何固まってんだ？早く助けてやれよ】

「母さんが……」

「うん……」

【はぁー、仕方ない、ほらよっ】

エンプティボトルをなのはとフェイトに投げ渡す。

「うわっ！」

【あの怪物を倒したあとそれを向ければガスが抜けて元に戻るぜ？】

それを聞いた2人は、お互いの顔を見て頷き、それぞれ呐喊する。

「デイバインバスター！」

「サンダーレイジ！」

それはプレシアに当たり大きく吹き飛ばす。

【ははは！いい感じじゃないか！】

「二人ともハザードレベル2。5くらいかな？」

そしてそのままなのはとフェイトを中心に攻めて行き、数分が経過。

バーススマッシュと化したプレシアを倒した。

そしてなのはがエンプティボトルを向けると、スマッシュの成分がボトルに吸収、ドラゴンボトルに変化した。

プレシアは元に戻るが、体は徐々に消えていく。

(フェイトside)

スタークとアリシア姉さんによって怪物にされた母さんを元に戻せた。

だけどその体は徐々に消えていつている。

「なんで!?!元に戻るんじゃないか……」

【戻ってるじゃないか】

まあ、生きて、とは一言も言っていないがな】

「あ、ああ」

スタークウウー！」

「母さん！すっかり！」

【それに俺はアリシアを治すとは言ったが元通りに治すなんて言っていない】

そしてさらに真実を突きつける

【ついでにアリシアの記憶が無いのも俺が消したからだ】

なっ!?

【単純に仲間がほしかつたからな、悪く思うなよ?】

「こ、の外、道が……………」

そして母さんは完全に消えた。

「ブラッドスターク、お前は!」

「絶対に捕まえる!」

「貴様、覚悟はよいな?」

「絶対許さないの!」

うん、母さんの仇!

全員で構える。

【はー、仕方ない

ちよつとだけ相手してやるよ】

「よーし、私も!」

姉さんはスタークの使ってたのと同じ銃と1本のボトルを取り出し

《バット!》

「蒸血」

《ミスト…マッチ!》

《バット…………バ、バット…………ファイア!》

姉さんは煙に包まれ、それがはれると身長がスタークほどに伸びていて蝙蝠をモチーフとしたような怪人に変わっていた。

「姉さん……………」

「今の私はナイトローグだよ、フエイト」

【さあ、いくぞ?】

スタークが動いたと思うと私となのは以外が吹き飛ばされた。

「なっ!?!」

「どこ見てるの？あなたたちの相手は私だよ？」
そして私たちには姉さん……ナイトローグが襲いかかってきた。

(香帆side)

転生者たち(とクロノ)に一瞬で近づき吹き飛ばした。

【さあ、遊んでやるよ！】

「ならば受けてみるよ！ブレイク・インパルス！」

クロノが魔法を放ってくるがそれを片手で止める。

「なっ!？」

【弱い、次！】

「なら俺だ！」

衛宮が複数の剣を投げて、自身も剣を持ち突撃してくる。

「鶴翼三連！」

それは避けずに体で受け止める。

「よし………何!？」

全て命中したにも関わらずほぼ無傷な私に衛宮は驚いています。

【おいおい、こんなもんか？なら期待はずれにも程があるぞ】

「なら、これにもそれがいえるか？」

貫き穿つ死翔の槍！

クーが槍を投げてくる。

【チツ、それはお断りだ！】

《コブラ！》

《スチームブレイク！コブラ！》

しかし流石はゲイボルク、軽々とコブラのスチームブレイクを貫き
私に命中する。

それによりそこそこのダメージを受けた私は地面を転がる。

【ガハッ………！】

「よし、やったか！」

それはフラグと言うんですよ？

ゆつくりと起き上がった私は

【仕方ない、少しでも本気見せてやるよ】

エボルドライバーを取り出し装着する。

《エボルドライバー！》

「ッ！まだ動けるのか……」

【さあ、遙か昔、火星の文明を滅ぼした兵器の力、その一端を見るがいー！】

《コブラ！ライダーシステム！》

《エボリューション！》

私はレバーを回す。

第九と思わしき音楽とともにエボルドライバーから前後にパイプが排出され、それがプラモデルのランナーのような物を作り出し、そこに液体が流れ怪しい霧を纏った装甲を形成する。

さらに私と前後のランナーの周りにはそれぞれ金のリングが

そしてあの言葉を口にする。

【変身】

装甲が前後から私を挟んで1つになり、合わさったリングが回転。

装甲についていた霧が吹き飛ばされ、姿が変わる。

宇宙とコブラが混ざりあったような、禍禍しい、凶悪な姿に。

《コブラ！コブラ！エボルコブラ！》

《フツハツハツハツハツハツハ！》

【エボル・フェーズ1】

「その姿は……………」

「この姿はエボル

仮面ライダーエボルだ」

「!?」

【さあ、行くぜ?】

転生者とクロノを殴ったり蹴ったりする。

するとそれだけで全員倒れ伏してしまいました。

【んー?おいおい、いくら連戦で疲れてるからって弱すぎだろ

はあ、白けるぜ

アリシアー、帰るぞ】

「はいはい、こっちも終わったしね

2人のレベルは2.7くらいだったよ」

【ほー、もう少しか】

楽しみですね。

さて帰りますか。

と、トランスチームガンを取り出したところで飛んできた剣に弾かれました。

王野ですか……………」

【なんだ?せっかく帰ろうとしてるところに邪魔しやがって】

「貴様など認めんぞ!ここは俺の世界だ!」

「こんなときに何言ってるんだバカ!見逃して貰えるんだから素直に……………」

「うるさい!来いエア!

死ぬがいい!」

うわあ、確か乖離剣でしたっけ?これすでに崩壊しかけのここで撃ったら全員ただじゃすまないでしょ……………」

仕方ないか……………」

【そうか、だが死ぬならお前一人で死んでくれ】

手に宇宙のような玉を作り出し王野に投げる。

それが命中した王野はバリアジャケットが解けて倒れる。

そして左手で王野を掴み上げ、右手でレバーを回す。

再び第九のような音楽が流れ……

《ready go!》

《エボルテックファイニッシュ!》

【じゃあな】

ライダーキックで生身の王野を蹴り飛ばす。

「ぐっ……はっ……」

そのまま倒れて動かなくなる。

《ciao》

「な、お前……」

【ああ、たぶん死んだんじゃないか？全くバカなやつだ】

「ッ！」

【ああ、そうだ、良いこと教えてやる

俺たちが使ってるこのボトルはフルボトルと言ってな、振ると身体能力が上がるんだよ

そしてハザードレベルが高いほど力を引き出せる】

周りが弱いとつまらないですし、これくらいなら教えても大丈夫だよね。

【そんじゃ、今度こそ帰らせてもらうぜ、ciao】

「じゃあねー♪」

てなわけで自宅に霧ワープで帰ります。

さて、色々とやらないと……

9話

(香帆side)

アリシアを連れて家に戻ってきた。

「じゃあまずはアリシア、変身魔法使って別人……そうだね、私の従姉妹として暮らそうか」

「それする必要あるの？スターク……いや、今は香帆だっけ」

「別にやらなくてもいいけど、基本家に籠りっぱなしになるよ？そのまま外行ったらフェイトとかにバレちゃうし」

「あー、うん、それは嫌だね、わかった」

納得したのか、アリシアは変身魔法で姿を少し変える。

髪色は金から黒へ、顔つきもフェイトとそっくりと言われない程度に変え、そして伊達メガネをかける。

それだけの簡単な変装(?)だけど、まあ問題ないでしょう。

アリシア・テスタロッサ改め、蛇野 亜里沙(アリサ)の誕生です。

「そういうえば、香帆」

なんでフェイトたちにボトル渡したの?」

「そっちの方が楽しめそうじゃない、こっちだけが無双してもつまんないしさ」

「ふーん」

「地球産戦闘民族、高町家の人間であるのはなら、力を引き出してくれそうだし楽しみなね」

後、アリシアもやりたいことあったら、自由にやっていいからね?」

「んー、わかった」

「じゃあ、とりあえず今日はもう休みましょう」

そう言っただけはアリシアと別れ、自分の部屋に行って寝転がる。

今後どう動くかを考え……あ、A's編で活動してない時にヴォルケンリッターに襲われた時用に、バリアジャケットの設定しましょうか。すっかり忘れてました。

そうですね……エボルのブラックホールフォームを彷彿とさせる感じでいいでしょう。

黒のインナーと黒のロングコート、それにところどころ入る白のライン、そして白の手袋。

ベルナージュの武器形態は白いフルボトルバスター。もちろんフルボトルを装填するところもついてます。

となると、使うボトルはかなり制限しないですね。

スタークの時に使ったやつは使うわけにはいきませんからね。

んー……ラビット、タンク、タカ、ガトリング、パンダ、ロケット
ト辺りでいいかな？

さて、これくらいですか。

闇の書……ナハトヴァールの成分とか欲しいけど、とれたりしますかね？とれなかったら、とれなかったでいいんですけど。

(アースラにて)

時の庭園攻略に参加したメンバーが会議室に集まっていた。

そこで事の顛末や被害を報告後、死者(王野とプレシア)の追悼がひっそりで行われ、今後の対策を話し合っていた。

「さて、まずはブラッドスターだ」

管理局は彼を危険人物として指名手配することとなった

容疑としては殺人とロストロギアの不所持、等だな」

「まあ、妥当だな」

「それでとりあえず色々と整理したいと思う」

まずは姿を変えた後だ」

「エボルとか名乗った姿だね」

「ああ、あいつはその時に使った道具を『遙か昔、火星の文明を滅ぼした兵器』と言った

「このことからほぼ間違いなくあれらの道具は……」
「ロストロギア……だよな？」

「おそらくそうだ、それにあいつの話が本当ならあれは危険すぎる
仮に確保出来ても即破壊すべきだろうな」

「うーん、私は本当だと思うよ」

「……フェイト、その根拠は？」

「スタークは黙ってたことは多いけど、嘘は一度もついてないから」

「アリシアの治療（？）や契約とかでだね」

「あと、あの力見るとね……」

「確かに……」

「そういえば、このフルボトルとか言うのもそうなのかな？」

なのはは、あの時のドラゴンフルボトルを机に置く。

「わからない、とりあえず解析に回してみよう」

「あいつは振れば身体能力が上がるのか言ってたな」

「それとハザードレベルなるものが高いほど、力を引き出せるとも」

「スタークと姉さんが話してたけど、私となのはのハザードレベルは

2.7くらいだとか……これって高いのかな？」

「そこらへんも調べないとな……やることが多いな……」

「とりあえず試しに皆で順番に振ってみるか？」

「いや、体に害がないとは限らない」

やるなら解析してからだ……あいつはこれらをどこで手に入れた

んだ……」

「そうだね……」

「とりあえず、他はナイトログとかいうのに変身したアリシアか？」

「そうだな」

なのはは、フェイト

戦ったのは君たちだろ、どうだった？」

「うーん、戦いかたはスタークとほとんど同じで、バルブのついた剣と

フルボトルをさして使う銃を使ったの」

「スタークと違うのは、普通に飛んでたところかな

スタークは飛べないって言ってたし」

「なるほど……わかった、とりあえず今はここまでだ」

僕はこのボトルを艦の技術担当に渡してくる、結果が出たらまた呼

ぶからそれまで各自、艦内で自由にしてくれ」

そう言つてクロノはフルボトルを持って部屋を出ていった。

なのはたちも出ていき、残った衛宮と遠坂は転生者同士の話をする。

「なあ、スタークはあの姿を仮面ライダーと名乗ったよな」

「ええ、間違いなくあの仮面ライダーよね」

「……何か知らないか？」

「知らないわよ、私が見てたのは女兒向けのアニメとかだし

「だいたい仮面ライダーなら男のあなたのほうが見てたんじゃないの？」

「確かに見てたが、小さい時だけだ

「そこまで出てきた中にあんなライダーはいなかったんだよ」

「そう………」

「とにかくもつと強くならなとな、仮面ライダーのスペックは桁違いだからな」

「そうね、なら訓練室でも行く？」

「ああ」

その後数時間が経ち、クロノから再び集合をかけられ集まる一同。

「何かわかったのか？」

「いや、ほぼ何もわからなかった」

「ええ………」

「まあ、担当した人によると、スタークの言っていた通り、振って持っている間は僅かだが能力上昇があったようだ

「特に体に害も今のところ出ていない」

「じゃあ、クロノ君、振ってみていい？」

「構わない、訓練室でやろう」

訓練室へ移動し、なのははフルボトルを振る。

シャカシャカシャカシャカシャカシャカ

そして、動き回る。

すると……………

「なあ、なのはの動き、いつもと違うように見えるんだが」

「ええ、明らかに違うよね」

「凄い……………」

「ああ、計測されたデータを見てもスペックが大きく上がっている」

その後、フェイトや他のみんなも試したが、フェイトがなのはほどではないがそこそこ上昇、残りはそこまで上がらなかった。

「なるほど……………なのは、今はこれを君に預ける」

クロノはなのはにフルボトルを渡す。

「え、いいの？」

「スタークの今までの行動を見る限りは、君やフェイトを何故か気にかけているみたいだからな

僕たちが地球を離れている間に、何かあったときに対抗出来るようにはしておいた方がいいだろう」

「わかった」

「一応言っておくが、襲われても可能なら逃げることを優先してくれよ

戦うしか選択肢がないとき用だからな」

「……………うん！」

「今の間はなんだ……………」

「なのは……………」

「大丈夫だ、俺と遠坂とユーノで見張っておく」

「いや、私は学校違うんだけど……………まあ、見れる限りはやっておくわ」
「では、これで解散だ

みんな、協力感謝する」

この数日後、

フェイトの裁判や事件の報告の為アースラは地球を離れることとなった。

全員で集まりお別れをする。

その時にフエイトがなのはと話したいと言い、他の人たちは離れ2人で話し合う。そこで改めて名前を呼びあい友達となった。そして想い出の証として、お互いのリボンを交換して別れて言った。

なお、それを影でこっそりと見ていた蛇と蝙蝠がいたのには、誰も気付かなかった。

A, 1話

(なのはside)

フェイトちゃんたちと別れて数ヶ月、この間にスタークは一切襲つて来なかった。

「ただど私は今、謎の小さい赤い魔導師に襲われている。

いきなり結界に取り込まれて、不意打ちしてきたけど、なんとか防御魔法を展開して助かった。

「ちっ、このー!」

「あなたは何者?!なんで私を狙うの!?!」

もしかしてスタークの新しい仲間!?

「はっ!誰が答えるかよ!いいからさっさとやられる!」

槌型のデバイスを振り回してくるので距離を取ってシューターで迎撃する。

最初は私の優勢だったけど、シューターがあの子の帽子に当たって壊れると、急に怒りだして

「アイゼン!カートリッジロード!」

その言葉と共にデバイスから薬莖が排出されて魔力が高まる。

そして変形して殴りかかってくる。

凄いスピードだったので避けられず、咄嗟に防御魔法でガードしたけど簡単に碎かれて、壁に叩きつけられた。

バリアジャケットとレイジングハートも大きなダメージを受けてしまっている。

「ふん、大人しくしてりゃ痛い目みないですんだんだよ」

何されるかわかんないけど、絶対に負けられない。

だから私はフルボトルを取り出して振る。

「あ?なんだお前、そんなおもちゃなんか振って

ふざけてるのか?」

おもちゃって……確かに見た目おもちゃっぽいけど。

これ知らないならスタークの仲間じゃないみたいだね。

「それはどうだろうね、だけど私はまだ負けてないよ」

「はっ！そんな状態で何ができる！」

そう言っただけで油断してるところに、小さなシューターをいくつか作り、あの子の周りを走りながら撃つ。

「こんなもの……何?」

防御魔法で防いでくれるけど、貫通してダメージを与える。やっぱりフルボトルって凄い。

「ちっ、もういい、これで仕留めてやる！」

あの子はシューターの途切れたところを狙って突っ込んできた。やっぱり自力で撃つのは難しい。そしてこれは避けれないと思い、目を瞑って覚悟した。

だけど痛みは来なくて、代わりに聞こえたのはデバイス同士のぶつかる音。

目を開けると、そこにはフェイトちゃんが。

「なんだ、お前」

「そいつの仲間か?」

「友達だ」

そう言っただけでフェイトちゃんはあの子と戦い始めた。

さらにはユーノ君と衛宮君、胡桃ちゃんが来た。

「なのは！大丈夫だった!」

「すまない、遅れた……」

「ごめんなさい……結界に邪魔されてなかなか来れなかったわ」

よかった、みんな来てくれたの。

「とりあえずなのはは休んでてくれ」

俺は行ってくる」

「私はなのはの治癒をするわ」

「僕も手伝うよ」

そしてフェイトちゃんと衛宮君vs謎の魔導師が始まった。

……しびらくして

「ひとまず、やれるとこまで治したわ」

「後はアースラのクロノたちが来てくれるといいんだけど……」

「結界をなんとかしないと無理よね」

『マスター』

「レイジングハート！大丈夫なの？」

『こちらは大丈夫です』

マスター、ブレイカーを撃って下さい』

「えっ!？」

「ちよつと、それは無茶じゃない!？」

『やれます、マスター』

「……わかった!」

「なのは!？」

「レイジングハート、カウントお願い!」

『カウント10、9………』

そのままカウントしていき、3 まで来たところで、いきなり私の胸から手が生えてきて、何かを掴んだ。

そこから魔力を吸いとられてる感じはするけど、ここまで来たならあとは撃つだけ!

『……1、starlight breaker』

「スターライト・ブレイカー!」

私の放った砲撃が結界を破り……アースラから来た人たちに無事回収された。

(香帆side)

A'sの始まる詳しい時期が12月としかわからない為、訓練したり、色々と作ったりして過ごしていた。

さて、ではそろそろ晩ご飯ですね。何かありますかね？

もやし、冷やご飯、キャベツ、玉ねぎ……

……ふむ、肉でも買いいに行きますか。

で、外に出たのはいいんですけど、なにやら結界に取り込まれてしまいました……これって、もしかしなくてもあれです？ヴォルケンリッターの。

でも魔力は変身魔法が使える程度だけ残して封印してるんですけど……まさかそれを感知されちゃいました？

「ふむ、結界内にいるということは魔導師か」

声が出たのでそつちを見ると、そこには剣を持った女性が。シグナムさんですね、はい。

「そこまで魔力は感じられんが、少しでも多く必要なのでな

嵬収させてもらう」

あれー、どうしよう（汗）

隙を見て逃げるしかないですよ。

ここでブラッドスタークに蒸血なんてしたら、彼女らが管理局にいた時にバレてしまいますからね。

とにかく、

「ベルナージュ、セットアップ」

その場でこっそり封印を解いてバリアジャケットを展開します。

そしてベル（大剣形態）を構える。

「ほう、お前剣士か」

「見た目はね、生憎ほとんど使ったことないから、まともには戦えないと思うよ」

……魔導師としては私、初戦闘なので勝てる気がしません。

「では、行くぞー！」

シグナムは手に持ったデバイスで斬りかかってくる。

それをベルで受け止めるが、腕力の差か止めきれず吹き飛ばされた。

やられっぱなしは嫌なので、大砲形態に変形させ引き金を引く。

「ふんー！」

が、それもデバイスの一振りで切り裂かれる。

今の私じゃ、やっぱり相手になりませんね……………

「その程度か？なら、終わらさせてもらおう」

やられるわけにはいきません。仕方なくフルボトルを使うことに。

《《ラビット！パンダ！》》

《《ジャストマッチです！》》

《《ジャストマッチブレイク！》》

撃ち込み直撃するが、少し後ろに押し込んだだけで大したダメージになつてません。

「管理局の雑魚とは少し違うようだな」

「それは光栄ですね…………今のも効かないとなると、全力でいきますよ！」

《《ラビット！パンダ！タカ！》》

《《ミラクルマッチです！》》

ベルの前に出た魔方陣に大型のエネルギーがチャージされる。

「ほう、正面から来るか」

「ええ、これでも届かない可能性は高いですけど、やらないよりはましです！」

「いいだろう、受けて立つ！」

レヴァンティン！カートリッジロード！」

そしてお互い構え…………

「紫電一閃！」

「いっけえ！」

《《ミラクルマッチブレイク！》》

互いに放つ。

それはほんの一瞬だけ拮抗したけど、すぐに破られて私は切られ倒れる。

スタークなら互角には戦えるはずなんですけどね。

「ガハッ……」

「最後のは少し良かったぞ、我らにはまだまだ及ばんがな

では、すまないが魔力を……ッ！」

嵬収されそうになったところで、少し離れたビルから桃色の砲撃が天に向けて発射され、結界が破られる。

あー、今日ですか、A，sの始まりは。

「結界が破られたか、管理局の者も来たようだし仕方ない

撤退させてもらおう」

助かりましたか………だけど一難去ってまた一難、と

「すまない、時空管理局の者だ

さっきまでの戦闘について少し話を聞かせてもらえないだろうか」

上手く切り抜けてやりましょう！

……その前にけっこう痛いので治癒魔法お願いしてもいいよね？

A, s2話

(香帆side)

管理局員のクロノに連れられてアースラで治療を受けた。

その間どう乗り越えるかを考えていた。

一番いいのは、フルボトル使ったのがバレてないことですが、可能性としては低いと思うわね。

バレてる場合は……拾った、これは絶対ダメですね。

貰ったや送られてきたも怪しすぎて無し。

ロストログア認定されるとすれば……家にデバイスと共に眠ってた、理由はわからない

これが一番自然かな？

ビルド本編でもベルナージュの腕輪は火星から持ち帰られてパンドラボックスと共に保管されてたし……

うん、これなら問題は……たぶんないだろうね。

え？少し無理がある？……私はエボルト本人じゃないんだからね！あいつみたいにそこまで頭が回るわけでもないしね。

と、いうわけで治療が終わり、クロノと再び会い事情聴取のお時間。

「さつきぶりだな、僕の名前は執務官のクロノ・ハラオウンだ」

「……蛇野香帆です」

「では、早速だがこの映像を見て貰いたい」

そして映し出されたのは私とシグナムの最後の一撃のシーン。

「うちのサーチャーが君の戦闘を偶然見つけてな、そして聞きたいのは……」

映像が止まり、私の装填したフルボトルが拡大されます。

「相手の情報も聞きたいが、まずは……これはフルボトルというものだな？」

まあ、隠す必要もないので首肯する。

「どこで、これを手に入れた？」

そう言って睨みつけてくる。

私は怯むことなく平常を装って、さっきのカバーストーリーを話す。

「ふむ……………デバイスとセットか……………だが……………」

嘘がバレてないよね……………」

「君の持つてるボトルを見せてもらってもいいか？」

断ると怪しまれるので仕方なく6個のフルボトルを見せる。

「ふむ……………色や絵がそれぞれ違うな……………」

「ええ、順番に

ラビット、タンク、パンダ、ロケット、タカ、ガトリング

です」

「なるほど……………わかった、次に聞きたいのはこいつについてだ」

見せられたのはブラッドスタークの画像。

「……………この人はいったい？」

「こいつは指名手配している犯罪者なんだ

そしてフルボトルを使用している

それで何か知らないかと思つてな」

よく知ってますよ、私だもの。

「……………いえ、ごめんなさい

見たことも聞いたこともないです」

「そうか……………わかった

最後に君が戦っていた人について聞かせてほしい、今彼女たちは様々な次元世界で魔道師を襲っているんだ」

「わかりました……………とは言つてもほぼ一方的にやられたので話せることはほとんどないんです、すみません」

「そうか、わかった

協力感謝する

それと、よかつたらだが協力してもらえないか？」

「はい？」

「今、管理局は人手不足でな……………とにかく手が欲しいんだ」

「まあ、偶然見かけた時に通報するくらいでよければ……………私は戦闘ではたいして役にたちませんし」

「ああ、それだけでも助かる

家まで送ろう……と言いたいが、少し立て込んでいてしばらく時間がかかる

その間、他にも協力してくれている子が今ブリッジにいるから会ってくるといい」

え、会いたくないんだけど……

「ちなみに君のことを伝えると1人は君のことを知っていたぞ」

マジかよ……

退路を防がれた私は、仕方なくブリッジへ。

そこには、衛宮とクーがいました。

「よお、蛇野」

「はじめましてだね

私は遠坂胡桃、クーでいいよ?」

「蛇野香帆です、よろしく」

『で、聞きたいんだが、お前も転生者でいいんだよな』

念話で衛宮が話しかけてくる。

『……そうですよ』

『てことは、俺と王野が転生者だということも知っていたのか?』

『ええ、あんなだけ目立ったらね』

『ジュエルシードの時は何してたの?』

『普通の生活送ってましたよ、戦闘は苦手ですから』

『そうか、原作知識はあるのか?』

『ありますよ、StSまでね』

『ブラッドスタークや仮面ライダーエボルについて知ってることはあるか?』

『クロノから聞いたけどフルボトル持つてるんでしょ、だから何か知らないかなって』

うーん、どうしましょうかね……知らないで通してもいいんですけど、少しだけ情報流してあげますか。

『原作の、覚えているだけで良ければ』

『!』

『是非教えて!』

『まず、フルボトルですけど全部で60本+αあります』

『多いな……』

『そして60本の方が全て揃うとパンドラボックスという世界を滅ぼしかねない物が開けます』

『なっ!?!』

『まあ、それが存在してるかはわかりませんがね』

そしてエボルとスタークですけど『仮面ライダービルド』におけるラスボスですね……そういやエボルってボトルは何を使っていたか、わかります?』

『たしか……コブラだったか?』

『もうひとつはライダーシステムだったね』

『ああ、それで赤いコブラと宇宙をモチーフとしたような姿だったな』
『なるほど……フェーズ1ですか』

『そういやそんなこと言ってたな……』

『フェーズ1つてことは2とかあるんだよね』

『ええ、完全体と言われているのがフェーズ4です』

フェーズ1の戦闘力は完全体の2%という設定があったはずなんです』

『あれで2%……だと』

『ただ、完全体になるのに必要なのはハザードレベル6.0以上なんです』

人間だと最大値は5.0なので人間やめない限りはなれないと思います』

『そうか……』

『特殊能力としては確か毒だったかと、ただし地球上に存在しない物ですけど』

特に使う予定のない情報を公開していきます。ブラックホールは……転生特典なので使えないこともないですけど過剰戦力な気がするので、あの場面まで使う気はないです。

『覚えているのはこれくらいですね』

『助かる……』

このあと、少し雑談をしてクロノが迎えに来たので家に帰った。

さて、あれをなのはに渡すならデバイスが修理中の今の時期ですね。

なのはが地球に戻ってきたらアリシアに渡しにいつてもらいますか。

A, s3話

(なのはside)

リンカーコアをやられてしばらく、徐々に回復してきてもう少しで完治するって言われたけど、レイジングハートが修理中で、何も出来ない私は家にある道場で一人でボーっとしていた。

「はあ……」

「ため息吐くと幸せが逃げるよー?」

「そうだよね……って、えっ?」

いきなり声が聞こえたからそちらを向くと、アリシアちゃんが………ん?」

「アリシア……ちゃん?」

「ん?どうしたの?」

「いや、だって……その服装……」

今のアリシアちゃんの服装は『威風堂々』と大きく書かれた白いシャツに、ところどころにデフォルメされた蝙蝠の絵が書かれている子供用のパジャマのようなズボン……

「……ちよつとダサくないかな?」

そう言うときアリシアちゃんは、

「なん……だと……!!?」

ショックを受けていた。

「なのはにはこのイケてる服装がわからないなんて……」

違った、驚いてただけだ……って全然イケてないからね!!?

「全く……スタークは『あー、うん、まあ、趣味は人それぞれだし……」

いいんじゃないか?』って褒めてくれたのにさ」

いや、それ絶対引かれてるよね!?

「と、とにかく服装は置いといて、何しに来たの!?!」

「あ、そうだ!はい、スタークからお届け物です!」

へ?スタークから?」

アリシアちゃんに投げ渡されたのは……小さな機械のドラゴン?胴体部分が大きくて、その上部には穴が空いている。

「これは？」

「スタークの作ったやつだよ……あれ？おかしいな、起動しないね……もしかしてハザードレベルが足りてない？」

へ？

「なら、上げさせるだけだね」

そうやってアリシアちゃんは道場に結界を展開した。

そしてフルボトルを取り出し振って、殴りかかってくる。

私はなんとか避けたけど、尻もちを着いた。

「ほらほら、早くそっちもかかっておいでよ」

レイジングハートがないから誰にも連絡がとれないので、私もフルボトルを振って戦う。

とりあえず立ち上がって拳を出すけど、簡単に止められる。

「弱いよー、ほらほら、もっともっとー！」

「えっ、ヒヤッ！」

「そいやっ！」

アリシアちゃんに掴まれた手を引かれ、倒れかけたところに蹴りが入って蹲る。

「ゴホッ、ゴホッ」

「むー、白けるね……そうだ！だったらなのはお友達とかを襲えばいいのかな？そしたら……」

アリサちゃんやすずかちゃんを襲う？

それは……

「ダメなのー！ー！！！！」

つい全力でアリシアちゃんを殴っちゃった。

それを受けたアリシアちゃんは床を転がっていった。

「あは、あはははは！いいよ、第二ラウンドだね！

蒸血！」

《ミスト……マッチ！》

《バット……ファイア！》

アリシアちゃんは笑った後、ナイトローグに変身した。

「さあ、はやくさつき渡したのでセットアップしなよ、待っててあげるからさ」

え？これってデバイスなの？

『……………ピー、ハザードレベル3。0以上を確認

クローズドラゴン、起動します』

いきなり流れたその機械音の後に渡されたデバイス、クローズドラゴンは動き出して私の周りを飛び始めた。

「えーと、クローズドラゴン？」

『ん……………ああ、お前が俺のマスターか？』

声が機械音から男の人の声になった!?

「えーと、たぶんそう……………なのかな？」

私は高町なのは！とにかく力を貸してほしいの！

『いいぜ、ボトルをセットしな

その後はいつも通りやれ、なのは！』

そう言つてクローズドラゴンは首と尻尾を体にたたんで私の手に落ちる。

そして私は言われた通りにボトルをクローズドラゴンにセットする。

《wake up!》

そして私の前後に蒼と桃色の魔方陣が展開された。

《Are you ready?》

「セットアップ！」

何故かあの音声の後に言わないといけない気がしたの。

2つの魔方陣が私を通過すると、バリアジャケットが展開された。

見た目はいつものバリアジャケットだけど、レイジングハートがなくて、代わりにクローズドラゴンがセットされた杭と2つの銃口みた

いなものがついた武器がついていた。

『どうだ、なのは』

「うん、なんかね、力が溢れてくる……今の私は負ける気がしないよ！」

「それじゃあ、いくよ」

ナイトローグがまた殴りかかってきたけど今度は避けて、殴り返す。

「ぐっ……それならこれでどう？」

ナイトローグは剣を取り出して斬りかかってくる。

「うひゃあー！」

距離をとろうにも、道場に張られた結界のせいで出れないから無理。拳での攻撃も当たる前に斬られる。

「クローズドラゴン、なんか他に武器ないの!？」

『あるぜ、これ使え』

《ビートクローザー!》

クローズドラゴンから剣が飛び出てきた。……え、剣!?

『ん?俺の持つてるデータでは、なのはは地球産戦闘民族高町家の出身で、家は御神流剣術とかいうのをやってるってのがあるんだが』

「何その情報!？」

『あと、それしか他に武器がないからな』

「そつちだけ言ったら良かったよね!？」

「何をデバイスと喧嘩してるの?倒しちゃおうよ?」

剣の技とかわからないので、とにかく振り回す。

それが偶然にもナイトローグの手に当たり、剣を弾き飛ばす。

「やったー！」

『おっし、なのは、とどめだ』

俺をツインブレイカーから外してもつかいっけろ』

「ツインブレイカー?」

『手についてる武器の名前だ』

「わかった！」

とりあえず邪魔な剣はそこらへんに投げ捨て、言われた通りにする。

《ready go!》

その音声とともにツインブレイカーにエネルギーがたまっていき、拳を覆う。

そして、拳をふるいナイトログにぶつける。

《レッツ・ブレイク!》

「うひやあああああ!!」

思い切り壁に叩きつけられたナイトログはアリシアちゃんに戻った。

「あいたた……まあ、目的は達成したし私は帰るね？」

「え、待って！」

「やーだよーだ」

結界を解除し、すぐに銃から煙をだして消えていった。

『逃げられたみたいだな』

「そうだね……ってそういうえばクロードドラゴンはスタークに作られたんじゃ……」

『あ？誰だよ、そいつ』

「へ？あなたを作った人じゃないの？」

『さあな、さつき起動したばっかだから、なんにも分からねえよ』

「えー………とりあえずアースラのみんなに相談なの」

アースラに行つて、みんなに説明したら驚かれた。

クロノ君は「なんでスタークはわざわざこちらを強くするようなことをするんだ……理解できん」と言っていた。

一応クロードドラゴンを調べたけど作成者の情報とかはなかった。

まあ、アリシアちゃんがスターク作つて言つてたけど。

あと、疑似ライダーシステムというものが搭載されてるらしい。

あんまり詳しい内容はわからなかったけど、どうやらブラッドスタークやナイトローク、プレシアさんが変化したような化け物と戦うとき限定でスペックが凄いいことになるらしい。

クローズドラゴンには特に盗聴やその類いの機能がついてないと、マスター認証もされてることもあり、そのままブラッドスタークたちに対抗するための力として私に預けられた。

……お兄ちゃんやお父さんに剣を教えてもらおうかな？

ていうか、レイジングハートと喧嘩しないかな？

A, S4話

(なのはside)

リンカーコアも完治して、フェイトちゃんのバルディッシュと共にレイジングハートも新しくなって戻ってきた。

最初はクローズドラゴンと、どちらがデバイスとして私にふさわしいかで喧嘩してたけど、担当が遠距離と近接で綺麗に別れることから、目を離れた隙にいつの間にか仲良くなって2人(?)で私のトレーニングメニューを考えてた。クローズドラゴンは何故かプロテイン飲んで筋肉つけろとばっか言ってくるんだけど……女の子が筋肉つけてどうするの？

試運転しようと訓練室にフェイトちゃんで行こうとしたら、以前戦った闇の書の騎士さんたちをクロノ君たちが見つけたという連絡が入って出動要請が出た。

私たちはすぐに張られた結界の上空に転移する。

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「セーリット、アーツアップ！」

新しいバリアジャケットに身を包んだ私たちは、それぞれの相手へと向かっていく。

私はこの前の赤い子のところに、フェイトちゃんは男の人のところに。

そこで対話を持ちかけたけど断られたから仕方なく……ほんつとに仕方なく、物理的手段に出ることに。決して新しくなったレイジングハートを使ったかったわけじゃないよ？ただ OHANASHI するだけなの。

(香帆side)

始まりましたね、なのはたちと闇の書の騎士たちとの第二戦が。

なのはもフェイトも新魔法やデバイスの新フォームで互角以上に

戦ってますね。

なのはに関しては何ィータを倒せそうですし……
そろそろ介入するのでしょうか。

「それじゃ、私はフェイトの方に行くからアリシアはなのはの方お願いね?」

「はいはい♪」

私たちはトランスチームガンにそれぞれのフルボトルを装填して
引き金を引く。

《コブラ!》《バット!》

「蒸血」

ミスト……マツチ!

《コ、コブラ……コブラ……ファイア!》

《バット……バ、バット……ファイア!》

さて、行きますか。

霧ワープでフェイトとシグナムの戦っているところへ飛びライフ
ルモードで狙撃する。

【俺も混ぜて貰おうか、お二人さん】

(フェイトside)

最初はアルフのような狼の耳と尻尾のついた男の人と戦っていた
けど、あちらの援軍として女剣士の人 came たので男の人の方はその場
から離れて、その人が代わりに私と戦うことに。

新しくなったバルディッシュの新形態ハーケンフォームと、新魔法
プラズマランサーで彼女に立ち向かう。

彼女はそれらを手に持ったデバイスの剣で防いだり、鞭のような形
態に変形させて攻撃してきたりする。

鞭による攻撃は自慢のスピードでかわしバルディッシュを打ち込
む。

「ははは！中々やるな」

「貴女こそ」

「お前に敬意を評して名乗るとしよう

私はヴォルケンリッターが将、シグナム

そして愛機はレヴァンティン

お前はなんという」

「私はフェイト、フェイト・テストロツサ

そしてデバイスはバルディッシュ」

「テストロツサにバルディッシュか

その名覚えておこう」

暫しの会話の後、再び戦おうとすると、

【俺も混ぜて貰おうか、お二人さん】

その声と共に銃弾が飛んできた。

私たちはその場から離れ避ける。

それよりも今の声は……………

「貴様、何者だ！」

【俺はブラッドスターク、以後お見知りおきを、闇の書の騎士さんよ
？】

っ！やっぱり……………母さんの仇！

「スタークうう!!」

【おおっ？】

「テストロツサ!？」

私はシグナムを放って、怒りとスピードに任せてスタークに突っ込
みバルディッシュで攻撃する。

だけど手に持っていた剣に防がれる。

それでも何度もバルディッシュをふるう。

【ははは！いいぞ！もつとだ！もつとお前の力を見せてみるお！フェイト・テストロッサア！】

「はあああああ!!!」

【ハザードレベル2. 8……2. 9……3. 0！】

ガキン！

すると攻撃が1発だけだけど当たりスタークを突き飛ばす。

「はあ、はあ……」

「だ、大丈夫か？テストロッサ」

シグナムも本来は敵だけど私の心配をしてくれた。

というか、困惑しているんだと思う。

【ははは！やはり怒りはよくハザードレベルを上げるなあ】

「あいつは一体？」

「管理局でも指名手配されてるS級犯罪者のブラッドスターク、本名不詳です」

「なんだと!？」

【ほう、俺はそんな上のランクなのか】

「まあいい、何しに来たかは知らんが私たちの邪魔をするのなら……」

【ああ、別にお前らの邪魔をする気はないぜ？

ただ、フェイト・テストロッサの今の力を見に来ただけだからな

予定では色々と挑発して怒らせてから戦おうと思っていたが、元々俺に怒りを持っていてくれたおかげでその手間が省けたよ】

っ！バカにして……！

【かなり満足いくものだったからな、これからも期待してるぜ？

ああ、これはサービスだ】

スタークはそう言うとか何かの端末を取り出して操作すると……

『sir、謎のデータを受信しました』
え？

『何かの設計図だと思われます』

【それじゃあな、ciao！】

「あ、待て！」

スタークは銃から出した霧に包まれ消えていった。

「なんだったんだ、あいつは……」

まあいい、テストロツサ」

そうだ、元々はシグナムと戦っていたんだ。

だけど今の私じゃ……」

「今回は引こう」

その状態のお前と戦っても満足できないからな、それに……」

勝てない……と思ったが、予想に反して彼女は引いてくれるようだ。

そして同時に管理局の張った結界が破壊された。

「今回の私の目的は魔力の蒐集ではなくザフィーラとヴィータの救出だからな」

そう言っただけで彼女は転移で消えていった。

「フェイト……！」

「えっ？あ、クー」

「大丈夫だった?!無事!?!」

「うん、スタークが来たけどすぐに帰っていったよ」

「そう……良かった……ごめんね、助けに行きたかったけど他の闇の書の騎士と戦ってたら覆面の男の人が現れてそいつらに襲われたからこれなかった」

そうなんだ……」

「とにかくアースラに戻ろ！フェイト」

「うん」

次はシグナムに勝つし、スタークも絶対に捕まえる！

(香帆 side) フェイトとの戦闘後、自宅にて

うーん、フェイトにあの設計図を渡せたけど、どうやってラビットのボトルを渡しにいきますかね？

「ただいまー」

あ、アリシアが帰ってきたみたいね。

「おかえり、アリシア」

「どうだった？」

「前は狭くて不覚をとったけど、今回は互角に戦えたよ♪」

それはよかった。

「だけど、ほんと凄いなあの子」

ほんとにこの前魔導師デビューした子なの？

一発、砲撃を避けきれなくて受けちゃったけどあれ威力高過ぎだよ

……」

「砲撃？ 剣とかじゃなくて？」

「うん、あの子2つのデバイスを同時に展開して、レイジングハートだっけ？ それに疑似ライダーシステムを適応させて砲撃してきたんだよ……」

……流石は管理局の白い魔王（未来）、予想もしない使い方をするね。たしかA・C・Sとかもあるんだっけね。疑似ライダーシステム適応の零距离バスターは受けたくないねえ。後、魔王の代名詞ことスターライトブレイカーも。

A, S5話

アースラ組、ハラオウン家会議室にて
まずはクロノが話し出す。

「この前の戦いでフェイトがスタークに渡されたというデータの内容がわかった」

「なんだったの？バルディッシュは何かの設計図だろうって言ってたけど」

「バルディッシュの言う通り、あれは設計図だった

レイジングハートとバルディッシュにフルボトルを装填可能にする機能をつける後付けパーツのな」

「でもそれ作ってもフルボトルが1個しかないから意味ないんじゃない？」

管理局（アースラ）の持つフルボトルはなのはに渡してあるドラゴン1個だけ、確かにこれでは意味がない。

「その通りだ……：……が、うちの技術部が解析^{バカ}だけでいいところを、調子に乗って作成に入ってますでに完成しているんだ」

どうしたものかと皆が悩んでいると、衛宮が何かに気づいたように発言する。

「あ、なあ、蛇野からボトル借りるとかどうだ？

あいつ確か6本持ってたよな、戦わないんなら代わりに借してくれとでも言えば……：……」

「「それだあ！」「」」

「そうと決まれば行くよ、フェイトちゃん！」

「うんー！」

走り出すのはとフェイト

だが、

「ちよつと待て、お前たち」

クロノが2人に話しかける。

「彼女の家は知っているのか？」

そう言われて固まる2人。

どうやら知らないようだ。

「とりあえず連絡をいれるから待っている」

(香帆side)

「それで私が呼ばれたわけね……」

まあ、こちらから渡しに行く手間が省けてよかったけどね。

「ああ、フルボトルを是非とも貸してほしい」

闇の書の騎士やスタークに対抗するためにな

もちろんただとは言わない、相応の対価を払おう」

理由は真面ね

「わかった

で、使うのは誰なの？」

「私だよ」

「えーと、フェイトだっけ？」

一応確認すると、フェイトは首肯する。

「ちよつと待ってね……私の護身用にあれは残しておいて……話に聞いたファイトの戦闘スタイルからすると……」

一応考えてるふりをする。すでに渡すものは決まってるけどね。

そしてラビットフルボトルを取り出しフェイトに渡す。

「合うのはこれかな？はい、どうぞ」

「あ、ありがとう！」

「いえいえ、頑張ってる？」

さて、対価はなにをぶん取ろうかな？

「それで対価だが……なにか希望はあるか？」

……これからのことも考えるとミッドのお金や土地、魔法についての教本、とかかな？

「んー、戦いとかは嫌だから管理局には入らないけど、魔法やミッドチルダに興味はあるからそっちに移住したいわね

土地が無理なら代わりにある程度のミッドのお金が欲しい」
とりあえずストレートに要求を突きつける。

「さすがに土地はこちらの一存で渡すことは出来ないな、だがお金なら可能だろう」

ちなみにミッドに移住したあと何をしたいのか、参考程度に聞かせて貰ってもいいか?」

「小さな喫茶店やりたいのよ」

あと……まあ、他にもフルボトル借りたい、とかなったら近い方がいいんじゃないかと思つて」

後半はただの建前。

喫茶店はスタークならやらないと。(謎の使命感)

「なるほど……」

「私たちと近いところなら地球じゃないの?」

「どうせ皆管理局入つてミッドに行くんでしよう?……せつかく出来た友達なんだから仲良くしたいし」

友達(偽)で、仲良く(スパイ的な意味で)だけどね。

「ひっそりと集まる場所に来るからいいかもしれないな」

その時、場所借りてもいいか?」

「そうだね、人気店になったら集まれないけどね」

「いいわよ」

衛宮とクローも賛成してくれる。

まあ、この2人の場合は転生者同士簡単に集まれるからいいよね、みたいな感じだろうけど。

ちなみに予定している店の名前は『nascita』

ビルドでの仮面ライダーたちの拠点のカフェと同じ名前です。

………コーヒーの味?この前自分で入れて飲んだけどとても不味かったよ。

フェイトにラビットフルボトルを渡した数日後、またシグナムと戦

う機会があつたようだが、フルボトルを使う前にいきなり現れた仮面の人物に不意打ちでやられて魔力を嵬収されたらしい。

原作通りつちや原作通りだけど、私としてはフェイトに勝って欲しかったな。

それはともかく、闇の書との対決当日が楽しみですね。

A, s6話

(香帆side)

12月20日

私は今、ミッドチルダに来ている。もちろん管理局には無断でだ。目的はとあるマッドサイエンティストとの会談。以前から様々な次元世界で探していたのだが、ついこないだ見つけ会談の約束を取り付けた。私の使ってるシステムについて知りたいか、と問いかけると簡単に釣れた。

既にお分かりだろうけど、相手は無^{アンリミテッド・デザイア}限の欲望ことジェイル・スカリエツティだ。

スタークの姿で約束の場所、ミッド郊外の廃墟にて彼を待っている。しばらくすると約束通り彼は来た。

「待たせたかね?」

「いいや、全くだ」

「そうかい、早速だが本題に入ろう」

【ああ】

「確認だが、君の使ってるシステムの解析をさせて貰える代わりに、私と協定を結びたい」

「主題はそれでいいのかな?」

【勿論だ】

協定の簡単な内容としては、私はスカリエツティに協力する。ただしある程度は好きにやらしてもらおう。勿論スカリエツティに害のない程度にね。

代わりに技術面で色々サポートしてもらおう。

「確かに君の使うものは初めて見るからね

それを解析出来るなんて、とてもわくわくするよ!」

【なら契約成立でいいのか?】

「勿論だとも!」

その言葉を聞いた私は変身を解く。

どこも変えていない、素の姿に。

「おや？それが君の素顔かい？」

「ええ、そうよ」

6年くらいしたらミッドに越してくるからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

私たちは握手をかわす。

そしてスカリエッティのアジトへ共に転移する。

そこでトランスチームガンと適当なフルボトルを1つ渡す。

「それじゃあ一先ず私は帰るわね」

闇の書事件のこともあるからね」

「おや、君のメインウェポンはこれじゃないのかい？」

「ちゃんと持つてるわよ、それは貴方に渡す用に作ったものだから

原理は貴方で調べてね、私は何故か作れるだけで詳しい原理は知ら

ないから」

そういってトランスチームガンを見せる。

「ほう？君の頭の方も少し調べてみたいね

どうだい、少し解剖をさせてくれないかね」

「やろうとしたらぶち殺すわよ」

「……………冗談だ」

「全く……………」

「ちなみに今回はどんな感じに活動するのだい？

君は管理局に協力しながらも敵なのだろう？」

それを聞いた私は銀色のフルボトルを取り出しトランスチームガ

ンにセットする。

《フルボトル！》

「こうするのよ」

《スチームアタック！ミラー！》

排出された煙が私を包み、晴れると私と鏡写しになった私の2人が

いた。セツトしたのはミラーフルボトル、そのスチームアタックの効果は煙に包まれた対象を複製するだけ。(鏡写しなので利き手やらが色々と逆になる)ちなみに複製元が生物なら動かすことも可能だが喋れない。

だけど、そこにデバイスであるベルナージュを接続して複製の制御を任せた。結果、喋れて動く人形の完成。

人格はベルナージュだが、そこは流石私の相棒。しっかり私と同じ声で私と同じように喋ってくれる。

後はスタークになる私が別人——石動惣一でいいか——の姿に擬態するだけ。

これなら敵としても管理局側としても活動できるし、よほど勘のいやつじやないとバレないでしょ。

強い攻撃とか受けるとすぐ壊れるから事件当日は……アリスやすずかたちの近くに配置かな？原作通りなら巻き込まれる、もし違ってもアリバイが出来るしね。

「ふむ、対象の複製か……強度とかはどうなってるのかな……」

複製に夢中になっているジェルには悪いが、複製を消してそのまま地球の自宅に戻る。その時にがっかりするような雰囲気のエイルが見えたが無視した。

イレギュラーによる闇の書の強化とかあつて、なのはたちじゃ倒せないとかあったら代わりに出られるようにエボルドライバーの確認もしつかりとする。

そういえば、闇の書の主である八神はやてには接触してないね……まあ、いいか。たぶん事件終わったら関わるでしょ、なのはやフェイトを通じて。

さて、それじゃあ料理の練習や経営について勉強しようか。コーヒーの味の改善は諦めた。

経営の勉強しようとして思った、ミッドと地球で方法とか違う可能性が高いことに。今度アースラの人から貰うか。最悪ジェルでも

いいけど。

そして来たる12月24日。
闇の書覚醒の日だ。

A, s7話

(なのはside)

今日は12月24日、クリスマスイブ。

以前、すずかちゃんに紹介されて友達になった八神はやてちゃんのお見舞いに、すずかちゃんとアリサちゃんとフェイトちゃんと衛宮君と胡桃ちゃんと一緒に来た。

だけど、はやてちゃんの病室には闇の書の守護騎士さんたちが居た。はやてちゃんはその人たちのことを家族って言ってたから、はやてちゃんが闇の書の主だっということが分かった。

ユーノ君のおかげで、闇の書は壊れている事が分かったからなんとか騎士のみんなを説得しないといけない。はやてちゃんは何も知らないみたいなので、アリサちゃんとすずかちゃんが帰ったあと、巻き込まないようにとシグナムさんに連れられて屋上に。

「あの一闇の書は……」

「完成させないでほしい、か？悪いが無理な相談だ」

「もう少しで完成してはやてが助かるんだ、ここでやめられるわけないだろうー！」

「いや、ちよつと話を……」

「どうしても止めるってんなら相手になつてやるよー！」

結果が展開されてヴィータちゃんたちがデバイスを起動する。

「仕方ない、一度無力化して話を聞いて貰えるようにするしかなさそうだな」

衛宮君の言う通りそれしかないみたい。

「いくよ、レイジングハート」

『OK, Master』

「バルディシユも」

『yes, sir』

「「「セットアップ！」」」

そして私とフェイトちゃんはフルボトルも取り出して、レイジングハートとバルディシユにセットする。

『ドラゴン！』

『ラビット！』

『explosion！』

それぞれ蒼と赤の魔方阵が目の前に現れ、私たちを通過するとバリアジャケットの一部が変化する。

私は両手の白い部分が蒼くなり、フェイトちゃんは両手両足の装甲が赤くなる。見た目としてはさほど変わってないけど、私は攻撃力、フェイトちゃんは速度がいつもより上がっている。さらにフェイトちゃんはいつもの形態ではなくソニックフォームという速度特化の形態なので普通には目で追えない速度を出すことができる。

そして私たちと闇の書の騎士たちの戦いが始まる。

(香帆side)

始まりましたね、前座(?)のなのはたちvs闇の書の守護騎士たち。ちが。

ベルナージュももう少しでアリサやすずかと合流できそうですし、決着がつくまで待ちますかね。

「どうなるかなー?フェイトたち勝てるかな?」

「闇の書に?勝てると思う、というか負けたら地球が滅びるから勝つて貰わないと困る」

「守護騎士との方は心配してないんだね」

「アリシアもしてないでしょ?」

「もっちゃん!」

さて、戦いの方は……なのはvsヴィータ、フェイトvsシグナム、衛宮&遠坂vsザツフィー&シヤマル、か。

原作だとザツフィーは後から援軍で来てたけど今回は始めからいるんだ。

元々魔力と防御の高いのはにドラゴンの攻撃力が付与されたこ

とで、ヴィータの攻撃を簡単に防いぎ反撃をいれている。

フェイトはソニックフォームとラビットで超強化されたスピードでシグナムを翻弄して的確に一撃を当てていつている。

衛宮と遠坂の方は言うまでもなく二人の方が有利だ。

そこでなのはがヴィータに、闇の書の真の名について語りだす。疑問に思ったのかヴィータの動きが止まり、なのはもそれに合わせて止まる。

だけど、そこに仮面の男が現れなのはと遠坂をバインドで拘束する。戦闘しながらも気づいたシグナムとフェイト。原作を知っているので来ることがわかっていた衛宮はバインドから逃れた。フェイトはそいつの元へ向かうも、もう一人現れフェイトも拘束される。衛宮も2vs1でやられてしまい捕まる。

突然の乱入に困惑する騎士たち。その隙をつき仮面の男たちはシヤマルから闇の書を奪い、騎士たちを拘束後シヤマルとシグナムを吸収する。さらになのはとフェイトに化け、はやてもこの場に召喚。

困惑するはやての前で真実を告げ、残るヴィータとザツフィーも吸収。それによりはやてが絶望し真の主として覚醒。

なのはたちがバインドから抜け出して駆けつけるも、時すでに遅く、闇の書の意味は破壊を開始した。

A, S8話

(no side)

「デアボリック・エミッション、闇に染まれ」

覚醒した闇の書は広域殲滅魔法、デアボリック・エミッションを發動させ周囲を攻撃する。

なのははソニックフォームで防御が落ちているフェイトの前に立ち、庇う形で防御魔法を發動させる。

衛宮も熾天覆う七つの円環を發動させ、みんなを守る。

なんとか耐えたなのはたち、だが闇の書の意味は次の魔法の発動準備をしている。

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。」

動きを止めて詠唱し、前に翳した手に周囲から膨大な量の魔力が集まっていく。

それを見たなのはを除いたメンバーは急いで距離を取る。遠坂はなのはを引きずっていく。

「え?.....え?」

「あのバ火力はくらいたくない……」

「ピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖い……」

「ちよつと、フェイトしっかり!」

『sir、射線上に一般人が取り残されています』

「え?ほんと!」

「案内して!」

『あちらです』

4人は急いで助けに向かった。

誰が残されているのかは知らない。

少しだけ時は戻って（アリサ side）

あーもう、なんなのよ。いきなり人に会わなくなったし、電話も誰にも通じないし……………

「あ……………」

「ん？どうしたのよ、すずか」

「蛇野さんじゃない？あれ」

そう言われたので見たら確かにいた。

とにかく話しかけてみるに限るわね。

「ねえ」

「ん？えーと……………バニングスに月村だっけ？」

「そうよ、あんた今誰かに電話通じる？」

「誰にも通じないよ、いきなり人もいなくなるし……………何が起きてるの？」

それはアタシ達が聞きたいわよ！

と、その時アタシの視界に巨大な光の玉が見えた。

いや、ここからじゃ見た目は小さいけど、かなり遠くにあるから本当の大きさはかなりデカイはずよね。

「アリサちゃんどうしたの？」

「あれ、なにかしら？」

「どれどれ……………（モシカシテ、スターライトブレイカー？）」

蛇野はなに呟いてるのよ、聞こえてるわよ。スターライトブレイカー？何よそれ。

と、そこに4筋の光がこちらに向かってきた、いや光じゃなくて人？

っていうか、なのはにフェイトに衛宮にクー!?なんで空飛んでんの!?それどうやってんの!?

「すいません、大丈夫ですか……………ってアリサちゃんにすずかちゃんに香帆ちゃん!？」

「久しぶりね、アリサ、香帆」

そっちははじめましてかな？遠坂胡桃です」

「あ、丁寧にどうも

月村すずかです」

あんたらは何、呑気に自己紹介してんのよ！

「アリサちゃん、現実逃避って大変なんだよ？」

あっはい。

「で？あれってもしかしくなくてもスターライトブレイカーよね、気のせいじゃなかったらこっちに向いてない？」

「……………ああ」

そこはなんの話を……………

「とにかく説明は後です、月村とバニングスはそこから動かないで伏せていてくれ」

は？

「……………防御だけ手伝うわよ、ないよりはましでしょう」

蛇野は青い色をしたボトルを取り出し振っている。

「助かる」

「貫け、閃光」

『starlight breaker』

あの光の玉からビームがこちらに……………って、これアタシたち死んだ？

「熾天覆う七つの円環！」

「二カートリッジロード！」

『『プロテクション』』

(no side)

衛宮とカートリッジを使ったのはとフェイト(と申し訳程度の香帆(ベルナージュ))の防御により、なんとか全員無傷でスターライトブレイカーを防いだ。

「私は戦力としては役にたたないから2人連れて避難しとくわよ」

「2人をお願いね」

「ええ」

『結界の外には出られないけど、内部の比較的安全っぽい地点に3人を転送するよ』

アースラからの転送魔法でアリサ、すずか、香帆はどこかに転送された。

『それとクロノ君が仮面の男たち……正体はリーゼ姉妹だったんだけどね?……捕まえたから心配しなくていいよ』

アースラからの連絡を受け、4人は闇の書に立ち向かう。

「闇の書さん!もうやめてください!」

「あ、バカ……」

「お前も私のことをそう呼ぶのだな……私は主はやての願いを、お前たちを破壊し世界を消去するという願いを叶えるだけだ」

「違う、それははやての本当の願いじゃない!」

「あなたもわかつているはず、はやてちゃんの本当の願いはそんなのじゃない、その願いは叶えたくないってことを!」

「……私はただの道具に過ぎない、故に主の願いを叶えるだけ」

「っ!この……頑固者おお!!」

その言葉を聞いたフェイトが怒って、ソニックフォームで突っ込んで行く。少し前の自分に重ねているのだろう、母親の命令に従うだけの意固地だった自分に。

だが、闇の書はフェイトの攻撃を受け止め、闇の書の内部に吸収した。

「滅びの時まで安らかに眠るがいい」

「フェイトちゃん!」

結界の中の街には火の柱がいくつか立ち、地面からは岩が突き出て来ている。

闇の書をどうかしない限り、このままでは地球は滅びるだろう。

「……行くよ、レイジングハート」

『OK』

「俺たちもいくぞ」

「ええ」

今、それに立ち向かうのはたちと闇の書との戦いが始まる。

A, s9話

(no side)

「穿て、ブラッディダガー」

「投影、一斉掃射！」

「アンサス！」

闇の書は大量の刃の弾丸を生成し、なのはたちに放つ。

それを衛宮と遠坂が剣と炎で相殺する。

「なのは、思いつきり撃ち込め！」

相手の弾丸は俺たちが弾く」

「そうそう、露払いは任せなさい」

「2人とも……………わかった！行くよ、レイジングハート！」

「デイバイン……………バスター……！」

なのはは桃色の砲撃を闇の書に放つ。それを闇の書はかわし、逆に砲撃を放ってくる。なのはも負けじと飛行しながら砲撃を繰り返す。

お互いに高速で飛行しながらの砲撃戦。

撃ち、かわし、たまに被弾する。これの繰り返しが続く。

だが、闇の書にはほとんどダメージが通らず、強いて言うならかすり傷程度しか与えられてない。逆になのははバリアジャケットがところどころボロボロになってきている。

「あんな高速で動き回られたら狙うものも狙えないな……………」

「そうね……………ゲイボルク投げて終わるのなら投げるけど、あれの肉体ははやてのでしょ

はやてが死にかねないから使えないのよね……………」

「今はなのはに任せるしかないのか……………」

弓と槍を構えていた転生者2人はいきなり離れていったのはと闇の書に置いていかれ、援護するのに適切なタイミングを見計らうがなかなか見つからない。

一方、もう1人の転生者は

「ボトルシステムで強化したなのはの砲撃でもさほどダメージが通らない……はやてを外に出すときに手を出すかな？」

思った以上にダメージが通ってないことに不安になっていた。

(なのはside)

「はあ、はあ……どうしよう……」

闇の書との撃ち合いしてたけど、とても強い。

今は爆煙に紛れて影に隠れている。

『Master, call full drive, please』

「えっ!?それはレイジングハートに負担がかかるし、フルボトルとの同時仕様なんて……」

『ボトルの方は使わないか俺で使えばいいだろ、なのは

はやて……だったか?を助けるんだろ』

クローズドラゴンも出てきて手助けしてくれるみたい。

『no problem, call please』

「……わかった!」

フルドライブはレイジングハートを強化するまでは使わないでと言われたけども、今使わないでどうするの!

「レイジングハート、エクセリオンモード!」

『OK』

「そしてクローズドラゴン、セットアップ!」

バリアジャケットが新しく構築されてボロボロだったのが綺麗になり、槍のような形になったレイジングハートを持って、ツインブレイカーもビームモードで右手に装着する。そして腰回りの部分にブースターの着いた龍の羽のような装甲が装着される。

「行くよ……」

レイジングハートとツインブレイカーに魔力を送り、それぞれからほぼ同時にバスターを放つ。

「ツインバスター!!」

闇の書さんはそれを防御魔法で防ぐけど、1つ目で防御を粉碎、同時に放たれた2発目が直撃する。

「くっ……」

「まだまだ行くよー」

そこからは再び飛行しながらの激しい砲撃戦に入る。

ただツインバスターはすぐに通用しなくなった。

理由は単純。防御魔法を二重に展開されただけ。

ただ、闇の書さんは砲撃だけでなく近接攻撃もしてくるようになった。

殴り飛ばされ岩に激突するけどなんとか立て直して、その岩の上に立つ。全身が痛くて悲鳴をあげてるけどなんとか耐える。

「レイジングハート、クローズドラゴン、行くよ」

『OK』

『おう』

闇の書さんも近くの岩の上に立ち、言葉を投げ掛けてくる。

「一つ覚えの砲撃、通ると思ってるか」

「通すー」

『A.C.S. standby』

レイジングハートからカートリッジが排出されて赤い刃と白い羽がはえる。

「レイジングハートとクローズドラゴンが力をくれてる……泣いてる子を救ってあげてっー」

『いや、俺はそんなこと言っ「ん?」(怒)「たな、うん』

クローズドラゴンが空気を読まないことをいいかけたから睨み付けて黙らす。

《アタックモード!》

そしてツインブレイカーをアタックモードにしてからクローズドラゴンを抜いてもう一度装填する。

《Ready Go!》

蒼い龍を模した炎がツインブレイカーから発生し、レイジングハートに纏りつく。

「エクセリオンバスターA.C.S. WithD!ドライブ!」

《Let's Brake!》

そのまま私は炎の龍と化して闇の書に呐喊する。

「そんなもの!」

闇の書は防御魔法で防ぐが、その場に留まる事が出来ずにどんどん押していく。

そして複数の岩を貫通し一際大きな岩に激突する。

そこで押し返そうとしてくるけどカートリッジを追加で3発ロードして威力をさらにあげる。

レイジングハートの先端がバリアを貫きそこに魔力を貯めていく。

「まさか!」

闇の書さんは驚いているけど関係ない。

「ブレイク………シューート!」

(香帆 side)

うわあ………もの凄い威力ね………

あんなのくらったら生き残れる自信無いわ………

というか、下手しあれではやて目覚めるんじゃない?

でも体への反動もかそうね。現に今、駆けつけた衛宮と遠坂に抱えて貰ってるし、クローズドラゴンの方は解除されてるし。

あ、フェイトが出てきたわね。

闇の書はどうなったかな?

A, s10 話

(フエイトside)

私は気がついたらどこかの部屋にいた。……あれ、ここって時の庭園に住んでた時の家？なんでここに？私は確か………何してたんだったけ？

「何してるのよ、フエイト」

「え？母さん？」

「今日はピクニックに行くんでしょ

アリシアも待ってるわよ、早く来なさい」

そう笑いかけながら話しかけてきた。

………違う、あれは母さんだけど母さんじゃない。よくわからないけど頭がそう理解している。

だけど、今はついていく以外にやることもないからついていくことに。

母さんと姉さんとリニスやアルフとピクニックに行つて、一緒に遊んだりご飯を食べたりした。

とても幸せ………なんだけど、やっぱりなにかが違う。

何が違う？

思いだそう。

私はフエイト・テスタロツサ、時空管理局の囑託魔導師で私立聖翔小学校の3年生。友達になのはヤクー、衛宮、アリサ、すずか、香帆………それとはやて。

最初の3人に初めて会ったのは、母さんに頼まれてジュエルシードを集めに行った時で………最後には母さんが………あ。

………ああ、そうか。これは夢だ。

現実だと母さんはもういないし、姉さんもスタークのところには。

確か今ははやてを助ける為に闇の書と戦ってたよね。早く戻らな

いと。

そう決めて行くこうとすると姉さんに声をかけられる。

「行くの？フェイト」

「姉さん……うん、行かなきゃ」

「そう………いつてらっしやい」

「行ってきます、バルディッシュユ！」

『yes sir』

後はこれもだね。ラビットフルボトルを取り出してふってセットする。

《ラビット！》

《explosion！》

そしてザンバーフォームに変更して夢の世界から飛び出る。

外に出ると、クーと衛宮に肩を借りているのはがいたのでそこに向かう。

「なのは！」

「フェイトちゃん……無事だったんだね」

再会を喜んでいると、闇の書の方から声が聞こえてきた。

『外にいる方！聞こえてますか!?この子の保護者の八神はやてです！』

「はやてちゃん！」

「はやて！」

『お、なのはちゃんにフェイトちゃんか』

ちようどええわ、ちよつと全力でこの子に一発きつい頼んでええか？

主導権取り返すのに必要なんや』

………どういうこと？

「とにかく全力全開で吹き飛ばせてことじゃないかな？」

「はやてが外に出るのに闇の書の意味が邪魔なんだろう」

そういうことか、なのははとても疲れてるみたいだし私が頑張らないとね！

「一緒にやろう……フェイトちゃん……はあはあ……ふう」

「え、なのはは!?無理はダメだよ!」

「にやはは、大丈夫だよ」

はやてちゃんも頑張ってるから……

まだいける!頑張れる!戦える!

レイジングハート!!!」

《ドラゴン!》

《explorasion!》

なのはは……そうだね!

「いこう、はやてを助けよう!」

「うん!」

(香帆side)

順調に進んでるね……ただなのはの疲労が大きいみたいだから念のため用意はしておこうか

《エボルドライバー!》

腰にエボルドライバーを付け、海賊を示すマークの描かれたボトルとライダーエボルボトルを取り出してドライバースにさす。

《パイレーツ!》《ライダーシステム!》

《クリエーション!》

レバーを回すが今回はクリエーション、変身ではなく武器の作成なのでランナーは現れない。

《Ready Go!》

《パイレーツ・フィニッシュ!》《ciao!》

パイプだけが伸びてきて弓の形となりカイゾクハツシヤーを形成して私の手に収まる。狙撃と言えばやっぱり弓だよね。

すでに擬態も済ましているし、用意は万全。

「エクセリオンバスター!」

「サンダーレイジ!」

ふむ、一応命中と。攻撃を受けた闇の書の意味は………なんとか耐えた、みたいな感じか。仕方ない。

《各駅電車》

カイゾクハツシヤーについている電車型ユニットを引っ張り、カイゾクハツシヤー本体にエネルギーをチャージしていく。

《急行電車》

倒さないことには進まないからね。

《快速電車》

あと少し!

《海賊電車》

今!

「ファイヤー！」

電車型ユニットから手を離すとエネルギー体となった電車が狙いを付けた相手に向かって一直線に飛んでいく。そしてそれは命中すると大爆発を起こす。なのはたちは驚き固まっている。

落ちたところから光が溢れ、そこからはやてが出てくる。闇の書……いや、夜天の書と共に。

(なのはside)

はやてちゃんを解放する為に出来るだけ強めの攻撃をしたけど耐えられた。フェイトちゃんと一緒にもう一度攻撃しようとしたら、どこからか光り耀く列車が走ってきて闇の書さんに当たった。

「え、なに？今の……」

「誰かが攻撃した……の？」

でも一体誰が？」

すると、光とともにはやてちゃんが出てきて私たちの前に来る。その手には夜天の書がある。

そして周りには守護騎士の皆も。

「夜天の光よ、我が手に集え、祝福の風リインフォース、セーフトアツプ！」

はやてちゃんの詠唱が終わるとさっきまで戦っていた闇の書さんみたいな姿に変わる。

そして私たちは再会を喜び、しばし会話する。

そうしているとクロノ君が来て、私たちに告げた。

「再会を喜んでるところすまない

時間がないから簡単に言うが、闇の書の防衛プログラムがもう少しで活動、いや暴走を再開させるそうだ

それを止める方法は強力な凍結魔法かアルカンシエルを撃つくらいだ

ただ、ここではアルカンシエルは場所の関係で撃てないし、凍結魔

法も正直効くかわからない

何か案はないか？」

えーと……………」

「なあ、その前に一つ

さっきの最後の攻撃はどこから、そして誰がやったんだ？」

「ああ、アースラのサーチャーで確認したところ一人の男だった、場所はここから800ほど離れたところだ

隣にはアリシアも居たからおそらくブラッドスタークだと思われる

「今もアースラに監視してもらっていて、何か動きがあれば教えてくれることになっている」

「そうか、わかった」

あ、そうだ！

「ねえ、フェイトちゃん、はやてちゃん」

「どうしたの？」

「ん？なんや？」

「えーとね……………かくかくしかじか……………」

「まるまるうまうま……………」

「ありかもしれんな」

相談も終わったし、出きるかクロノ君に聞かないとね。

「ねえ！クロノ君！」

「なんだ？」

「そのアルカンシエル？つてどこでも撃てるの？」

「どこでもつて、例えば？」

「今、アースラのいる場所！」

「宇宙空間で！」

それを聞くとアースラのエイミーさんから通信が入り、

『もちろん出来ますよ！管理局のテクノロジーなめないで下さい！』

よしー。

「なら決まりだな」

「まずは防衛プログラムに攻撃してコアをだす」

「それを宇宙空間に転送してアルカンシエルで消し飛ばす」
簡単だね！

「それじゃあ皆、行くで！」

「」「うん！（ああ！）」「」「」

A, s i l 話

(香帆side)

さて、防衛プログラムvsなのはたちの戦いは結果だけ言うと、なのはたちが勝った。そして私も勝った。

意味がわからない？仕方ない、特別に説明してあげよう。

暴走直前の防衛プログラムに対峙するのはたち。

「いいか、まずは凍結魔法で封印する

そのためには先に障壁を破壊しなければならぬ」

クロノが皆に告げる。

「それでも止められなかった場合はなのはたちの全力全壊でコアを露出させ、転送魔法で宇宙空間に送りアルカンシエルで消し飛ばす」

「ちよつと、絶対今の全開のところ文字がおかしいよ、クロノ君！」

「気のせいだから気にするな」

「せや、シヤマル

始まる前に皆を頼むわ

特になのはちゃんな」

「任せて、はやてちゃん

静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

シヤマルから発生した風がなのは、フェイト、遠坂、衛宮を包み癒していく。

「凄……」

「ふふふ、湖の騎士シヤマルと風のリング、クラーレルヴィント癒しと補助が本領です」

「これなら行ける！」

そして、防衛プログラムが暴走を始めた。

「それじゃあ、まずは僕たちが！」

「動きを止めるよ！」

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

ユーノとアルフのバインドが防衛プログラムから出る触手を切り裂く。

「縛れ、鋼の軛！」

さらにザファイラも参戦し触手をどんどん切り裂いていく。

「よし、次だ！」

クロノの言葉になのはとヴィータが飛び出す。

「なら、行くぞ！合わせろよ！」

高町な……なの……なんとか！」

「なのはなの！」

ヴィータちゃんもね！」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン！」

『G i g a n t f o r m』

ハンマーが徐々に巨大化していき、それを振り回すヴィータ。

「轟・天・爆・砕！ギガント……シユラーク！」

それを防衛プログラムに叩きつける瞬間、槌のサイズが防衛プログラムとほぼ同等まで大きくなっていった。

その叩きつけによりバリアの一枚目にヒビが入る。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン行きます！」

『L o a d C a r t r i d g e』

「エクセリオンバスター！」

桃色の砲撃で一枚目が完全に割れる。

「次！シグナムとテストアロツサちゃん！」

「剣の騎士シグナムの魂、炎の魔剣レヴァンティン！そのもう一つの姿！」

『B o g e n f o r m』

シャマルの声に真っ先にシグナムが反応し、武器を構える。手に持つレヴァンティンとその鞘が連結し弓となる。

「翔けよ！隼！」

『Sturm falke』

現れた矢を引き絞り放つ。それは二枚目の障壁に当たり爆発を起こしヒビを入れる。

「フェイト・テスタロッサ、バルデイツシュ・ザンバー、行きます！」

大剣のようになっていたバルデイツシュをまずは一振り。それで近づいてきた触手を切り裂く。

「撃ち抜け！雷神！」

『Jet Zamber』

魔力刃が伸び二枚目を粉碎する。

防衛プログラムもやられっぱなしではなく、反撃の為に触手から砲撃をしようとする。

「盾の守護獣、ザファイラ！砲撃なんぞ撃たせん！」

が、それもザファイラに止められる。

「次は衛宮君と遠坂ちゃん！」

「了解！やつとまともな出番が来た……」

「クーでよいぞ、シャマル」

衛宮は弓に捻れた剣を投影して構え、遠坂は紅い槍を二振り構える。

「I am the born of my sword ……」
我 が 骨 子 は 捻 れ 狂 っ っ っ

「刺し穿ち、突き穿つ！貫き穿つ死翔の槍！」
カラド・ボルグ

螺旋剣が空間ごと3枚目の障壁を螺子切り、槍が4枚目にヒビを入れ、そのまま破壊する。

「はやてちゃん！」

「彼方より来たれ、やどりぎの枝、銀月の槍となりて、撃ち貫け！」

はやての前にベルカの魔方阵が展開され、計七つの光弾が現れる。

「石化の槍、ミストルティーン！」

それは防衛プログラムに飛んでいき、命中したところからどんどん石化させていく。が、石化したところが崩れると再生が始まりすぐに元に戻っていく。

このままじやきりが無いと思われたが、攻撃はしつかりと通っている。それを理解したクロノは自分も続くことにした。

「行くぞ、デュランダル」

『OK, Boss』

クロノが構えたのはデュランダル。仮面の男として活動していたリーゼ姉妹の主、ギル・グレアム提督より渡されたデバイスだ。

「悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて永遠の眠りを与えよ……凍てつけ！」

『Eternal Coffin』

クロノの魔法で周囲の海ごと防衛プログラムを凍結させていく。

だが、それでも防衛プログラムは抗おうとしている。

「これでも止まらないか

なのは！フェイト！はやて！」

「「うん！」」

三人は防衛プログラムの上をとり、それぞれ最強の魔法の発射準備をする。

『Starlight Breaker』

「これが私の全力全開！スターライト……」

『Plasma Zamber』

「雷光一閃！プラズマザンバー……」

「ごめんな、おやすみな……」

響け、終焉の笛！ラグナロク……」

「「ブレイカー!!!」」

三人の魔法は防衛プログラムの外殻を消し飛ばし、コアだけが残った。

「本体コア、露出！捕まえた！」

シャマル、ユーノ、アルフがコアにたどり着き転送魔法を使用する、その瞬間。

「じゃあ、それちよつと借りるね？」

《スチームブレイク！バット！》

突如現れたアリシア……ナイトローグが妨害し、コアを奪い取る。

「さてさて、どうなるかなー？」

そんなことを言いながら、エンプティボトルをコアに向けるアリシア。すると、コアが粒子となりボトルに吸収された。

「なっ!？」

「へ？あれ、何をしたんや!？」

「おー！成分とれたや」

「いつの間に!?!エイミー!どうなっている!?!」

『そ、それがほんとに一瞬でそっちにワープして連絡する間もなかったの!』

アースラからの連絡がなかったことにクロノが気づき、確認をとった。帰ってきた言葉に驚かずにはいられなかった。

【お疲れさん、ナイトローグ】

そこに声が聞こえてきた。なのはたちにとっては忘れられない声だ。

声が出た方にいたのは、防衛プログラムによって作られた岩場の上にたたずむ男。

【こっちで会うのは初めてだな、俺はブラッドスターク……いや、もういいか

エボルトという、以後お見知りおきを】

そういつてお辞儀するスターク改めエボルト。

「ほら、エボルト

成分回収できたよー」

ナイトローグは横にいき先ほど手にいれたボトルをエボルトに渡す。

【おう、お疲れさん】

「一体何が目的だ!」

クロノが声をあげ、よく事情がわかっていないはやてを除き全員が武器を構えている。ヴォルケンリッターは以前フェイトとシグナムが戦ったときに見えていて犯罪者だというのは聞いたので警戒している。

「んー？強いていうなら闇の書の成分とれないかなー？つて思つてな後、地球を壊されるのは流石に勘弁だからお前らが失敗した時に備えていた。

ま、結果としては成分もとれたし地球も守れたしで万々歳だ！」

「ッ！」

【さて、そんじゃ俺らは帰るが……その前に少しくらいなら遊んでやってもいいぜ？】

《コブラ！》《ライダーシステム！》

《エボリューション！》

【変身】

《エボルコブラ！フツハツハツハツハ！》

エボルに変身し構える。

が、誰もその場から動かない。

【なんだ、やらないのか？しらけるなあ

じゃあ帰るか、ciao！】

戦う気がないと判断したエボルトは手に銃を呼び出し、そこから発生させた霧につつまれ帰っていった。

そして時間が経つこと約一分、ほんとにいなくなったのを確信した皆はホッと息をついた。

これで闇の書事件は一応の終結を迎えた。

A, s12話

(香帆side)

さて、防衛プログラムの成分が入ったボトル……これが取れたならスカリエツティに頼んであれ作ってもらいますか。ビルドドライバーでも渡せばやってくれるでしょ。そうすればお互いの戦力が増えて、スカリエツティは最高評議会を消せるし、私はスカリエツティ側につくことで敵として活動できて、

管理局の闇も潰せる／全てを破壊できる

からね。……なんか少しおかしかったような。

まあ、気のせいでしょう。

あー、そういえばリインフォース・アインスはどうしようかな。エボルトの力使えばたぶん助けられるとは思うけど……仲間なら間に合ってるしいいか。敵に塩を送るばかりじゃただのいいやつになるし。

ああ、そろそろアリシアにもスクラツシユドライバーとか与えた方がいいかな？なのはやフェイトは強くなってきたるし、トランスチームシステムで守護騎士にも勝てるかはわからないのよね……

ラビット……ビルドはフェイト、ドラゴン……クローズがなのは、ローグがアリシア、エボルが私。グリスどうしようか……いなくてもいいけどいた方が盛り上がりそうなのよね。とりあえずグリスは保留。いいやつがいたらネビュラガス撃ち込んで、渡せばいいだけだし。

さて、それじゃあ早速ビルドドライバーにスクラツシユドライバーを作ってスカリエツティのところに……

ピルルルル……

ん？こんなときに電話か、空気呼んで欲しいなあ。

誰からだ？……なのはか。あれ、連絡先渡してたっけ？

「はい、もしもしっ」

『あ、香帆ちゃん!?急いでこっちに来て!』

「はい?いきなり何よ、今忙しいんだけど?」

どうせ、リインフォース・アインスのことでしょうね。

『えーと、リインフォースさんが大変なの!だからお願い!』ピツ、プープープー

ええ……切られたし。一方的に伝えて切ってたよ……

あー、でもいかなきゃなんないんだろうな……仕方ない。

そんなわけでトランスチームガンの霧ワープでなのはたちのいるビル付近にこっそり転移。そこからゆっくり歩いてビルに入り、なのはたちを探す。

原作通りなら屋上にいるはずなので一先ずそこを目指す。で、案の定はやてを除いたみんな揃っていた。

「あ!香帆ちゃん!」

「はいはい、なんなのいったい」

リインフォースさんが大変だってしか聞いてないけど」

「そのね?……」

纏めると、防衛プログラムがなくなっただけしばらくしたらまた復活する。だから自分を消して欲しい。ってこと。

私は何もしないけど、とりあえず転生者二人に聞いてみる。

(で?あんたたちはリインフォースに何かするの?)

(私は戦闘とかしか無理だし、ルーン魔術でもたぶん助けられないかな)

(ルールブレイカーで何とか出来ないかと思っっている)

(それって確か全ての魔法を破戒するやつでしょ?下手すればリインフォースまで消えないかしら?)

(あ……)

(仮に消えなくてもリインフォースさんが魔法一切使えなくなるかもね……)

というわけで衛宮の案もボツ。助かる可能性もなくはないけど同じくらい消える可能性もある。

まあ、そのまま消滅させるくらいならやってもいいとは思っけど。

そしてその時が来た。

「すまないがそろそろお別れだ

主はやてにもよろしく頼む」

そう言つてリインフォースは魔法を起動……………

「ちよつと待ったー!!!」

する直前にはやてが来た。

「主はやて……………」

「あかん、あかんでーリインフォース!

せつかく一緒におれるようになったのに消えるなんてー!」

「申し訳ありません、ですがもうこれしかないのです

主はやてを闇の書の呪縛から解き放つには……………」

「そんな……………」

「それでは、さようなら

主はやて、そしてその友人たちよ」

今度こそリインフォースは魔法を起動させ、そのまま消えていった。

「リインフォースー!!!」

「はやてちゃん……………リインフォースさん……………」

「はやて……………リインフォース……………」

はやては泣き叫び、なのはとフェイトは名前を呟き涙を流す。

私はそこまで関わってないのに呼ばれた意味が正直わからないので、とりあえずメッセージを送ってからこつそり帰った。そして元々の予定通り、ビルドドライバースクランシュドライバースの作成に手を着けた。

アリシアには既にあのボトルを渡してスカリエツテイのところに行ってもらっている。ついでに戦闘機人と一緒に訓練でもしとけばいい、とも言つて。

確かなのはが一度撃墜されるのは二年後だったかな。クローズドラゴンもあるしガジェットにやられるとは思えないし、そこはなんとかしないといけないか……

まあ、上手くいけばあれが使えるかしら？

とにかく楽しみだ。フツハツハツハツハ！

……なんかまた少しおかしくなってた。んー、気のせいよね？

空白期の1

(香帆side)

「お邪魔するわよ」

完成させたアリシアのスクラツシユドライバーとスカリエツテイに渡す予定のビルドドライバーを持って、私はスカリエツテイの研究所(ダミー等ではなく本拠地)に霧ワープでやって来てた。

「ようこそいらっしやいました」

「ウーノ、アリシアとドクターは？」

「ドクターは自室、アリシアはトーレたちと戦闘訓練中です」

事前にスカリエツテイの作り上げた戦闘機人の一人で秘書的な役割のウーノに連絡してあったのでワープした直後に出迎えてくれた。

ビルドドライバーを作ってから思ったけど闇の書の防衛プログラムの成分をコピーしてデータ化して渡せばいいんじゃないかと思っただけど、ビルドドライバーで仕事受けてくれたから別のことを頼む時に使えばいいか。

「じゃあ、先にアリシアの方に行こうかな」

ああ、ウーノはこれをドクターに渡しといて、約束の物って言えばわかるから」

「かしこまりました」

ウーノと別れた私はアリシアにスクラツシユドライバーを渡すために訓練室へと足を進めた。

訓練室に入ると、長身の女性と息をきらせて寝転んでいるアリシアがいた。

「ヤッホー、アリシア元気してた？」

「元気だよ毎日大変だけど」グテー

声だけは元気ですね。

「トーレ、何したの？」

「彼女の戦いかたに色々が無駄があったので矯正していた

これで少しはましになったはずだ」

ふーむ、まあ戦闘特化のトーレがいうなら大丈夫でしょ。

「アリシア、ちょっと、いやかなり早いかもしれないけど新しい力、いる？」

それを聞いてアリシアは即起き上がった。

「いるー！」

まあ、実際ナイトローグじゃ戦闘経験くらいしか積みませんから、徐々に成長しているのはたちに勝てなくなっていきますしね。

「じゃあほら、はい」

アリシアにスクラッシュドライバーとクロコダイルクラックフルボトルを渡す。

「だけど……」

「とりあえずつけなければいいのかな」

私が言葉を発する前にアリシアは腰にスクラッシュドライバーをつける

《スクラッシュドライバー!!》

そしてクロコダイルクラックフルボトルのキャップを正面に合わせる。

《Danger!》

「え、アリシア待っ……」

私の静止を聞かずにボトルをドライバーに装填し……

《クロコダイル!》

「たぶんこれでいいよね、変身ー！」

ドライバーのレンチを下げた。

すると、アリシアの周りにビーカーが現れ……

「あれ？」

………ることはなく、代わりに電気が流れた。

「アババババ………チーン」プシュー

「あーもう、人の話聞かないから……」

「何が起きたんだ？」

横で見えていたトローレが聞いてくる。

「ああ、スクラッシュユードライバーここ、れ使うのにはハザードレベル4、0以上必要なのよ
現在のアリシアは3、5、だから変身できなかったのよ」
「なるほど」

「それは先に言つてよー！」

復活したアリシアが文句を言ってくるが、

「それ言う前に使つたのアリシアでしょうが……」

「えへへ……照れるなあ」

誉めてないから！

「とりあえずしばらくはナイトローグを使わないで特訓ね、ナイトローグ使つてるとハザードレベル上がらないから」

「はいー！」

ほんとにわかつてるのか不安になる返事だが、いいでしょう。

アリシアはこれでいいとしてスカリエツティのところへ行く。

「おや、待っていたよ

注文されたのはそこだ」

部屋に入ると早速ビルドドライバーを弄っていたスカリエツティ。

偶然にも私を見つけたのか、目的の物を教えて貰えた。

「ん、ありがとう」

「いやいや、君の渡してくれる物は非常に興味深いからね」

「そう、それなら闇の書の防衛プログラムのデータはあるかしら？」

それを聞いたスカリエツティはすぐこちらに飛んできて

「なんだって!?!もちろん欲しいよー！」

「貸し一つね」

エボルトの力で防衛プログラムを解析、データに纏めてスカリエツティに渡す。

「もちろんだともー！これで一月は寝ないで逝けるー！」

いや、寝ろよ。

作業に戻ったスカリエツティは放っておいて、頼んでいた起動前の

人造魔導師のポッドの前に立つ。

「さあ、実験を始めましょうか」

ポッドの中に闇の書からとったボトルを入れ、その成分とネビュラガスを注入する。ただ、ボトルの成分をそのままいれると暴走して大変なことになるので色々と弄る。欲しいのは安定した戦闘能力なので暴走なんてものは取り除く。もちろんスマッシュなんかにならないように注意する。

今やつてゐることは人造魔導師をベースにした、守護騎士のような存在の作成。というかエボルト流戦闘機人？

まあ、違法つちや違法だけど仲間作るにはこれしかないでしょ。犯罪者くらいなら仲間に来るだらうけど仲間に加えてもいいことはないからね。あつてもスマッシュにして暴れさせるくらい？

さて、この娘の名前はどうか……確か防衛プログラムって別名ナハトヴァールだね？ならナハトでいいか。姿も闇の書に取り込まれていた時のはやてに似ているしね。

ここまですたら後は目覚めるのを待っただけ。それまでにこの娘に渡すものの調整だね。

その後はミッドに行つて、土地を見る。いいところがあれば買う。つて感じかしら？

冬休みで学校が無い今のうちに色々やらないとね。

次のアクションは約二年後、さいっこうに楽しくなってきた！

空白期の2

(香帆side)

調整を開始して数日、無事終了したのでこれから起動する。

私の他にも、スカリエツティやアリシア、ウーノを始めとした戦闘
機人たちが見ている。

「さあ、起きなさい、ナハトー！」

ポットを解放し、ナハトを起こす。

出てきたナハトは裸なのですぐに服を着せる。

「おはようございます？…でいいのか？」

「そうね、おはよう」

私のことわかるかしら？」

「……………ええ、主ですね」

私の忠誠をここに誓います」

そういつて深々と礼をするナハト。

うんうん、上出来ね。後は……………眼鏡でもかけさせるかな？

欲を言うならあの時の内海のように

「あなたに、忠誠を……………誓おおおおお!!!」

つて言つて欲しかったなあ……………いや、ナハトは女だし合わない
か。

「ツー」フラッ

ちよつとめまいが……………寝不足かな？でもスカリエツティとは違つ
てすっかり睡眠とかはとつていたんだけど……………

まあ、いいか。後でゆっくり休めばいいだけだし。

「さて、それじゃ早速ナハトの力見せてもらおうか

アリシア、相手お願いね？」

「私？まだスクラツシユドライバ―使えないよ？」

「大丈夫、ルールはお互い生身なのと、相手を大ケガさせないこと

それ以外ならなんでもあり」

このルールならアリシアでも勝てなくはないでしょ……………アリシア
が気付いてたらの話だけど。

そして訓練室に移動して、二人が位置につく。
「では、始めてください」

……うん、まあ結果としてはアリシアの負け。ナハトは近接の能力も高いし、魔法もそこそこ使える。アリシアは最後の最後にフルボルト使っても良いことに気付いたけどその時点で疲れはてていたから負けた。

「あー、もう！悔しいー！」

「なんでもありって言ったのに、気付かないアリシアが悪い」
「そうだけどさ……」

アリシアは着ている上着の前を開けて『不服』とかかれたTシャツを見せてくる。まあ、そんなことされても無視するけど。

「ナハト、お疲れ様

とりあえずこれ、渡すから慣れて」

一つのドライバーと二つのフルボルトを渡す。

「ふむ、承知した

主の期待に応えられるよう努力しよう」

ナハトはそう言い、笑った。

そして二年の時間が経ち、とある世界にて三人と大量の卵のような機械の影があった。

「スカリエッティからの依頼のついでに俺たちファウストの力を見せてやろうぜ」

「ファウストって?」

「ん? ああ、チーム名だよ」

まあ、俺たち三人だけしかいないけどなあ」

「なるほどね、それにしてもなのはと戦うの久しぶりだなあ」

【まあ、頑張れよ】

「お任せを」

「もっちゃん!」

そしてナハトとアリシアはスカリエツティの作った機械群を引き連れ、雪の中を進んでいった。

私は少し様子見をした後、帰ることにした。

(ヴィータ side)

今回の任務は簡単ですぐに終わるはずだった。現に任務自体は無事に終わり帰還する途中だった。

だけど、それは帰りに起こった。

「ん? おい、なのは

あれ、なんだ?」

「え?」

アタシが見つけたのは卵のような形の浮遊する機械群。そいつらはこちらに武器を向けて……

「総員、回避!」

魔力砲を放ってきた。

警告したが、何人かがそれにやられ墜ちた。

管理局に確認をとるもデータがなく、危険物認定を受けたので撃墜の許可が出た。

「ツ! この……デイベインバスター!」

なのはが反撃の為に砲撃をする。アタシの予想だとこれで沈むはずだった。だが、なのはのバスターは当たる直前に霧散し消えた。

「AMFだと……!」

AMF……アンチ・マギリンク・フィールドは魔力結合を霧散させ魔法を無効化するものだ。

「だったら……レイジングハート、リリース！」

クローズドラゴン、セットアップ！」

『OK』

『おっしや、行くぜ！……wake up！』

《ビートクローザー！》

なのはは砲撃特化のレイジングハートから近接特化のクローズドラゴンに変更。魔法は無効化されるが物理攻撃や、魔法によって発生した現象は無効化できないのでなのはの判断は間違っていないだろう。

「アタシたちも行くぞ！」

アタシはアイゼンを振るって機械共を落としていく。なのはは実家の剣術を少しだけ習ったみたいでそれを用いて次々と斬っていた。

いや、ほんとに何なんだよ、なのはの家族とその剣術は。あのシグナムが魔法無しとはいえ、剣で負けたんだぞ？神速とかいうの、魔法無しでよく出来るわ……まだなのはは出来ないみたいだが、習得したらアタシたち出る幕無くねえか？

それはともかく、機械群を半分ほどぶっ潰した時だった。いきなり拍手が聞こえてきたんだ。

「流石だね、この程度じゃ相手にもなっていないや」

いたのは確かアリシアとかいったフェイトの姉と……！

「……リインフォース？」

なんでだ!?あいつは二年前に……

「私はナハト、主エボルトの命を受け来た

そのリインフォースとやらとは別人だ」

なん……だと!?エボルトの仲間だったのか。

「さあ、私たちと遊ぼう？」

《スクラッシュドライブ!!》

「遊びではないのだぞ……」

《エボルドライブ!!》

アリシアは見たことのない機械を、ナハトと名乗ったやつはアリシ

アの発言に呆れながらエボルトの使っていた機械を腰につけた。

《Danger!》

《クロコダイル!》

アリシアは取り出したボトルのキャップを回し、そのまま装填。

《蝙蝠!》《発動機!》

《エボルマツチ!》

ナハトは紫と赤の二本のボトルを装填。二年前と管理局の資料で見たのとは違う音声が鳴る。そしてレバーを回すと、クモの巣のようにパイプがベルトから飛び出る。

「変身!」

アリシアはベルトについてるレバーを押すと、周りにビーカーが現れ中に黒っぽい液体で満たされ、外側からワニの顎のようなものがそれを噛み砕いていく。

《割れる!喰われる!砕け散る!》

体が紫のスーツとアーマーに包まれると今度は顔の所が噛み砕かれ、複眼が露になる。

《クロコダイル イン ログ!!!》

《オーラア!》

最後には女性の悲鳴のようなのが聞こえてくる。

なのはから聞いた話や資料で見たナイトログとは違うみてえだな。

一方、ナハトは……

《バットエンジン!》

《フツハツハツハ!》

パイプが絡み付き黒いスーツに白と紫のアーマーに包まれる。

「ファウスト所属、仮面ライダーログ」

「同じく、仮面ライダーマッドログ」

二人はそう名乗った。

「ヴィータちゃん、みんなを連れて下がって」

「何言ってるんだ、アタシも手伝うぜ」

あいつら相手なら足手まといかもしれないが、抑えるくらいなら

やってやるよ」

「……わかった、それじゃあ」

ああ、行くぜ！

ローグがなのはと、マッドローグがアタシと戦い始める。

「あなたが相手ですか」

「ああ、悪いが捕まえさせて貰うぜ！」

「やれるものならやってみるがいい」

マッドローグは手を前に出すとブラッディダガーを発動させ、こちらに飛ばしてくる。

「シユワルベフリーゲン！」

それをアタシは炸裂する鉄球を発射し相殺する。だが、発生した煙に紛れてアタシの目の前に来たマッドローグの斬撃を受ける。

「ッ！この……ラケーテンハンマー!!」

ラケーテンハンマーを使用し、反撃に移るが

《Ready go!》

《エボルテックアタック!》

マッドローグはベルトのレバーを回し、蝙蝠を思わせる羽を展開し、飛翔。アタシのハンマーを避け、高速での突進攻撃をしてくる。防衛魔法も間に合わず、アタシは吹き飛び地面に叩きつけられる。

「くそっ……」

「こちらに集中していいのかわか？」

「何？」

そう言われなのはの方を見ると……

「キヤッ！」

「さあ、これで終わりだよ！」

《クラックアップフィニッシュ!》

今、ローグにとどめの一撃をやられていた。両足で挟むように蹴り回転を加えてなのはを落とす。地面に落ちたなのはは体の所々から血を大量に流して気絶している。

「ありや、やり過ぎた？」

「なのはああああ!!」

アタシはなのはを助ける為に飛び出し、同時にカートリッジをロード。アイゼンを巨大化させ、なのはに当たらないように気を付けてローグに向けて振りかぶる。

「轟・天・爆・砕！ギガントシユラーク!!」

だが、叩きつけた時には既にあいつらは居らず、どうやら逃げられたようだ。

一先ず安心したアタシははやてたちに連絡を入れ、なのはを急いで治療できる所まで担いでいった。

空白期の3

(はやてside)

ヴィータからなのはちゃんが撃墜され大ケガを負ったと連絡があり、急いで搬送された病院へ向かった。

「ヴィータ！」

「はやて……悪い、なのはを守れなかった……」

ヴィータはいつものような元気はなく、今にも泣きそうな雰囲気だった。

「大丈夫、大丈夫や

なのはちゃんは生きとるんや、ならまた起きてくれる

起きて私らと一緒に笑ってくれるから、な？」

「グズツ、ああ！」

「はやて！ヴィータ！」

「主！」

私がヴィータを慰めていたらフェイトちゃんとシグナム達が来た。

「おお、フェイトちゃん、それにシグナム達も

もう少ししかかると思ってたんけどな」

「なのはが大ケガしたって聞いたから飛んできたんだよ」

「そういう主こそ、額に汗を滲ませてますので大急ぎで来たのではないですか？」

アハハ、シグナムにはかなわんな。

「まあ、それはともかくヴィータ

何があったか教えて貰えるか？」

「ああ、実は……」

ヴィータから聞いたのは任務の帰りにAMFを展開している謎の機械群に襲われたこと。それを撃退したのち二人に襲われたこと。そのうちの一人はナイトローグことアリシアちゃんが新しい力を得て、仮面ライダーローグとかいうのになったこと。もう一人はリインフォースのそっくりさんのナハトとかいうので、仮面ライダーマッドローグというものになったこと。この二年間でだいぶ強くなったと

思ってたなのはちゃんがローグに完膚無きにやられたこと。

「不味いな……なのはちゃんが戦えないとなると、エボルト一味が出てきた時、フェイトちゃんくらいとちゃうの？まともに戦えるのは」「確かに、資料で見たナイトローグやブラッドスタークとかであれば我ら守護騎士でも互角ではあったでしょうが……」

「私、頑張るよ！なのはの分まで！」

フェイトちゃんは気合いを入れているんやけど、戦力不足には変わりないんよな。どこかに戦力落ちとらんかなー、なんて。

「まあ、この話は一旦置いてなのはちゃんの様子見に行こか」

なのはちゃんの病室に入ると、なのはちゃんは呼吸器や点滴などを付けて、体の至る所に包帯を巻いて寝ていた。お医者さんの話によると、このケガだと本来は二度と目覚めない可能性もあったが、自然治癒力が高いのか予想外にケガの治りが早いため、恐らく近いうちに目覚めるだろうとのこと。ただ、このまま目覚めない可能性も0ではないらしい。

ま、なのはちゃんのことやし目覚めないってことはないやろ。

お見舞いも終わったので、リインを連れて街に行くことに。今回は急やったからなんもお見舞いの品物持って行けなかったしな。今度行くときの為の下見や。なのはちゃんなら何がええやろな？

あ、リインはこの前新しく産まれた家族であるユニゾンデバイスのことで正式名称をリインフォース・ツヴァイって言うんや。魔法の制御が苦手な私の手伝いをしてくれるいい娘なんやで！

と、まあそんなことを考えながら色々と店を周っていると、爆発音が聞こえてきたから管理局員としてその現場に向かう。そこには、一体のスマッシュが。

二年前の闇の書事件、それから数ヶ月が経った頃からミッドチルダに一月に2〜3体ほどのスマッシュが出るようになったんや。まあ、そのほとんどがそれほど強くもなく、私とかシグナムたち守護騎士やフェイトちゃんやなのはちゃんが出るまでもなく、普通の魔導師部隊

でも倒せるレベルや。

たまに魔導師部隊じゃ手も足も出ないようか強いのが出てきて、なのはちやんたちが出撃する時もあるけどな。

それと不思議なのが、魔導師部隊となのはちやんたち個人だと、普通に考えると魔導師部隊の方が強いはずなんやけど、スマッシュ相手だとなのはちやんたち個人の方が早く倒し終わるねん。

ハザードレベル？とかいうやつがなのはちやんたち高い……のか
ようわからんけど、それが高いほどスマッシュに攻撃が通りやすいと
かなんとか聞いたんよな。

ただ、それを調べる方法は時たま現れるエボルトが言ってるだけや
から本当かはわからん。

私ら？なんでなのはちやんと同じように倒せるかはわかつたらん
よ。てか、私らも知りたいわ。

って、こんなことしたらんと早くスマッシュ倒さんとな。

「リイン、ユニゾン！」

「はいですうー！」

リインとユニゾンした私は、スマッシュの気を引く為に適当な射撃
魔法を発動。

それが当たると、スマッシュは狙い通りこっちに突っ込んできた。
そのまま郊外の廃棄区画へと誘導する。私はスマッシュを倒せる威
力のある魔法はほとんどが大規模過ぎて街中じゃ使えんからな。

まあ、結果として誘導の途中で魔導師部隊が駆けつけてきたからそ
ちらに任せて無事撃破。

仕事も終わったし見舞いの品の搜索の続きやな！

(香帆 side)

やっぱり、ローグとマッドローグの同時出撃はやり過ぎたか……な
のが大ケガしちやったし……

この二人はなのはが快復するまで交戦はやめさせよう。

ビルドドライバーもなのはとフェイトに渡さないといけないしね。

どうやって渡そうかな？誰か攫ってドライバー持たせたらわざと逃がす？……まあ、保留でいいか。これも一つの手段として考えておこう。

後は原作関連だと、ゼスト隊の壊滅……は既に終わったし。まあ、クイント・ナカジマだけ？彼女だけ拾ってきたけどね。というか、気づいたら目の前にいたから拾っただけだけ。確かゼスト隊の壊滅のところを興味本意で見に行ったんだけど……何故かあんまり覚えてない。

とりあえずは戦兎萬木 巧にやったみたい記憶消して顔を変えてからミッドチルダの家で保護して家の管理を任せている。最終的に素性をばらしてからロストスマッシュにして娘にぶつけると面白そうだ。

家はカフェとかの部分は完成してるけど、年齢的にまだ運営は無理だから開店は早くても7年後……高校行かなければ4年後かな？

終わりの時は近い！

空白期の4

(香帆side)

「と、いうわけで協力してほしいのよ」

「いや、来てすぐそれだけ言われてもわかんないわよ！ちゃんと詳細を話さない！」

「アリサちゃん、落ち着いて？蛇野さんも要点を飛ばさないで……」

「もちろん冗談よ、バーニングを弄るのは楽しいわね。」

で、本題なのだけど……」

私は今、地球の月村すずかとアリサ・バーニング……「バーニングスよ！」……バーニングスと話をしにきた。

とにかく月村とバーニングスの技術力でビルドドライバ作っても
らえないかな？つてね。一応、ビルドドライバの外装を写真にとつ
て持ってきた。後、クローズドラゴンの解析データや、なのはとフェ
イトのデバイスに取り付けたボトルシステムのデータも。ボトルの
成分を抽出するところはこの二つのデータでいけるはず。

「なのはが落とされたのは聞いてるわよね？」

「ええ」

「そいつらに対抗する為には何をすればいいかなって考えた結果、相
手と同じ力を使えばいいんじゃないかって思ったのよ。だから作る
うってね。」

現に私たちが巻き込まれた二年前のあれでも、なのはとフェイトは
当初敵だったシグナムたちの技術を取り込んでるから」

「確かに道理ね」

「でもどうするの？一から手を着けなきゃならないと思うんだけど
……」

「大丈夫よ」

私の手元にあるボトルを四つ……タカ、パンダ、ガトリング、ロケツ
トと持ってきた資料を渡す。これで香帆としての手持ちはタンクだ
けになった。

「これって……」

「私は技術者じゃないし、魔導師としても弱いから戦っても足を引つ張るだけ。だから貴女たちに頼むしかないのよ。……なのはたちの為に、協力してください」

私は二人に頭を下げた。……もちろん演技だけどね？

二人はお互いに顔を見合せ、告げた。

「……………あー！もう！わかったわよ！協力してあげるから頭をあげなさい！」

「いいの？」

「うん、なのはちゃんとフェイトちゃんの助けになるんだから協力するよ！」

「ありがとう」

私は内心で大喜びです。断られたら私が作って、スカリエツティのガジェットに組み込んでなのはたちに回収させるか、誰か攫って持たせて逃がすくらいしなきゃならなかったから。

「そういえばなんで管理局に頼まなかったの？あそこの方が技術力高いんじゃない？」

「いや、確かにそうだけどなのはたち以外だとあんまり関わりないし、一般人の言うことなんて戯言だと思われて受け取って貰えないだろうし……それに貴女たちならなのはたちの為ならやってくれると思ったから」

「じゃあ、早速パパに頼んでみるわ」

「私もお姉ちゃんとかに言ってみるよ」

「ええ、よろしくね」

一先ず協力は取り付けた。ここからは月村とバーニング……じゃなかったバーニングスの頑張りに期待するしかない。もしstringersの始まりに間に合わない場合はスカリエツティに頼んで二人の会社にハッキングしてデータをこっそり送ってもらおう。

二人との話を終え、アジトに戻ってきた。一年ほど前にナンバーズがゼストと昏睡状態のメガーヌ、そしてルーテシア、アギトを連れてきてからはアジトでは基本的に石動惣一の姿で過ごしている。スカ

リエツティから情報は漏れないけど、この人たちから漏れる可能性は0じゃないからね。まあ、スカリエツティと協力関係にある間ならたぶん大丈夫だろうけど一応……ね。

さて、私も少し体動かしますか。さつそくアリシアとナハト呼んで……つと。

【それじゃあ、始めるか】

今回はコブラじゃないのを使用するとしますか。

青のエボルボトルとライダーエボルボトルをドライバーに装填する。

《ドラゴン！》《ライダーシステム！》

《エポリューション！》

レバーを回すと第九が流れ、コブラの時と同じようにランナーが形成されていく。

《Are you ready?》

「変身！」

《ドラゴン！ドラゴン！エボルドラゴン！》

《フツハツハツハツハ！！》

クローズの頭部にエボルの体というどう見ても不釣り合いなエボル・ドラゴンフォーム。こんなのも強いから文句はあまり言えない。

《Danger！》

《クロコダイル！》

「変身♪」

《蝙蝠！》《発動機！》

《エボルマツチ！》

「変身」

《クロコダイル イン ログ！》《オーラア！》

《バットエンジン！》《フツハツハツハツハ！》

アリシアが前衛、ナハトが後衛で攻めてくる。攻撃を受けた時だけ

その部分が硬くなるローグが盾となり、魔法やヒット&アウェイを軸とするナハトが攻撃する。普通のやつが相手ならそれでも十分だけど……

【相手が悪かったな！】

エボルとかの攻撃は普通にその防御越えるんだよね。

アリシアに拳での一撃を加え後退させると、ナハトがブラッディダガーを放ってくる。

《ビートクローザー！》

私はビートクローザーを呼び出し、それらを斬る。

《ネビュラスチームガン！》

アリシアはネビュラスチームガンを取り出し銃撃しながら近付いてくる。それは体で受けるがエボルの装甲は簡単には抜けない。ナハトの方も気にしながらスチームブレードを手にしたアリシアと剣をぶつけ合う。

《忍者！》《ライダーシステム！》

《クリエーション！》

ナハトは忍者フルボトルと複製して渡したライダーエボルボトルをドライバーに装填。

《Ready go！》

《忍者！フィニッシュ！》《ciao》

レバーを回し、4コマ忍法刀を生成した。そしてトリガーを一回引き

《分身の術！》

ナハトが四人に分身した。内二人がアリシアと共に近接、残り二人が魔法で遠距離からの攻撃。

ああ、なんかなのはたちとの戦力差が縮むどころか離れてる気がする……

とにかくいくらエボルでも五人同時はめんどくさいから数を減らしますか。アリシアを弾き怯ませると、即座にドラゴンエボルボトルをドライバーから抜き、ビートクローザーに装填。

《スペシャルチューン！》

更にグリップエンドを一回引き蒼炎を纏わせ周囲を切り払う。

《ヒツパレー！》

《スマッシュスラッシュ！》

アリシアに大ダメージを与え、分身二人を消滅させる。ナハトは残った分身をこちらに突っ込ませてくる。それも同じように斬り、二人を見るとそれぞれ必殺技の構えをしていた。

《クラックアップフィニッシュ！》

《Ready go！》

《エボルテックアタック！》

それに対抗して私もレバーを回し必殺技に

《Ready go！》

《エボルテックフィニッシュ！》

二人のライダーキックと私のライダーキックがぶつかり合い、大きな爆発を引き起こす。その後立っていたのは私だけ。エボルの力なら当たり前……と言いたいところだけど、変身者が私だから負けてもおかしくなかった。

後、何故か最近エボルに変身する度に力が増している。ハザードレベルは変わってないんだけど。ちょっと調べる必要があるような……不調はたまに頭が痛くなるくらいだから大丈夫だとは思う。

まあ、それはそれとしてスパークリングやハザードトリガーを渡すとなった時の為に工学とかも少し学んだ方がいいかな？特典の力で作れるとはいえ、それ以外はからっきしだし。

空白期の5

(フエイトside)

小学校から中学校に上がって三年目。

管理局と地球を交互に行来しての生活の中、私となのはとはやての休みが偶然被って一緒に遊びに行こうってなったときに、アリサとすずかにすずかの家に来てほしいって言われた。

なんだろう、と思いつつも二人と一緒にいくと、すずかの家にはクーと衛宮君、香帆もいた。なのはが思わず三人に聞く。

「あれ、三人も呼ばれたの?」

「ああ、知らぬ仲じやないから来なさいって言われてな」

「一体何の用だろうね?」

「……………」

香帆だけ何も話さない。椅子に座ってメイドのファリンさんが持ってきた紅茶を飲んでいる。

突如、ドアがバンツ!と勢いよく開きアリサとすずか、すずかの姉の忍さんが部屋に入ってきた。部屋を見渡して、全員が揃ってるか確認した後、話し出した。

「よし、全員揃ってるわね!」

「忍さん、何の用ですか?」

「んー、用って言うか……………私はこの二人の手伝いをしただけよ?」

手伝い?

「フッフッフ……………聞いて驚きなさい!なのは!フエイト!あんたたちの新戦力よ!」

一瞬アリサの後ろが爆発したかのように見えた。……………ってその手に持つのは!?

「これはビルドドライバー、私たちの未来を創造^{ビルド}するためのドライバーだよ!」

すずかも自慢げに語る。

「ちなみに製作は月村とバニングスが、情報提供や試運転の協力者はそこで優雅に紅茶飲んでいる香帆ちゃんです!」

忍さんが補足すると、皆が香帆の方を見る。香帆は目をそらし頬を赤く染めて、

「……まあ、私なりの手伝いよ」

小声で告げた。

「じゃあほら、受け取りなさい、なのは、フェイト」

私となのはに、ビルドドライバーなる物が渡された。

あれ、でもこれってエボルトが使ってたやつと……

「クローズドラゴンやボトルシステムだったかしら？それに使われてたものをベースに作ったものよ

ちゃんと機能するし、戦闘力も上がるのは香帆で実験済だから安心なさい！」

「前のなのはちゃんみたいに大ケガして欲しくないからって思ってたんだけど……」

そこまで言われると……受けとるしかないよね！

「って、私はないんかい!？」

はやてが叫んだ。

「はやては使えるかわからないから……」

「とりあえず確実に使えるであろうなのはちゃんとフェイトちゃんのを作ったの」

はやてが使えるかわからない？どういうこと？

「えーとね、クローズドラゴンのシステムとかを流用してるからハザードレベル？だっけ、それが3.0を超えないと使えなくなっちゃったの。香帆ちゃんに試運転を頼んだのも、私たちの中で使えたのが香帆ちゃんだけだったから……」

へー、って香帆も使えるんだ……それなら……

「……言っとくけど私はそれ貰っても戦わないわよ

私の弱さは知ってるでしょう？」

残念……本気で戦ってみたかったのに……

何か香帆が一瞬寒気がしたって言うてるけど風邪かな？

外に移動してさっそくビルドドライバーを使ってみることに。私

となのはの前にはもう一つのビルドドライバーをつけた香帆が。なにやら試作品を使って使い方の実演をしてくれりとか。その実演の前に、香帆に二本目のボトルを渡された。青色で戦車のマークのかかれたタンクフルボトルを。

「それじゃあ、実験を始めるわよ」

香帆は両手に持った二本のボトルを手首のスナップを聞かせて振り、キャップを正面に合わせる。そしてボトルをドライバーに入れる。……なんか手慣れてるね。

《タカ！》《ガトリング！》

ドライバーが音声を発すると、香帆はドライバーのレバーを回していく。前後にパイプが出てきて何かの形を作り、その中を橙と灰色の二つの液体が流れていく。

パイプが途切れ、しつかりとしたボディとなるとレバーを回すのを止め、言葉を告げた。

「変身」

すると香帆を包みこみ、装甲となって姿を変える。

《天空の暴れん坊！》《ホークガトリング！》

《Yeah！》

凄い……！

「ほら、なのはとフェイトもやりなさい」

あ、そうだね！

……ところでなのはもボトルは一本しかないけど？

「えーと、香帆ちゃん。私もボトル一本しかないんだけど……」

「クローズドラゴンを使いなさい」

？クローズドラゴンを？

「え、入るの？」

「使われてるシステムをみる限りはいける……はずよ」

はずって………だけどまあ……

「とりあえずやろう！なのは！」

「あ、うん！」

私はラビットとタンクの二本を、なのははドラゴンを振る。私はそ

のまま、なのははクローズドラゴンにさしてドライバーに入れる。

《ラビット!》《タンク!》

《ベストマッチ!》

ベストマッチ?

《Wake Up!》《Cross—Z Dragon!》

「ほんとに反応したの……」

なのはもなんか言ってるけど後で聞けばいいよね。

私たちはレバーを回していく。なのはの方からは時折ドラゴンの叫び声が聞こえる。

私は赤と青、なのはは紺一色の液体が香帆と同じようにパイプを流れていく。それがボディを形作ったところで、

「変身!」

そう告げ、私たちを包みこんでいく。

《鋼のムーンサルト!》《ラビットタンク!》

《Yeah!》

《Wake Up Burning!》《Get Cross—Z Dragon!》

《Yeah!》

「ちゃんと出来たみたいね、なら今日はこれで……」
「待って!」

なのはがいきなりストップをかけた。どうしたのか聞こうとしたけどその前に続いたなのはの言葉でなんとなく察した。

「はやてちゃん! 封時結界お願い!」

『』
『』
『』

「……そういうことか、任せときー!」

はやてがサムズアップして答えると同時に封時結界が展開された。

「……まさかとは思うけど」

「相手してもらおうよ、香帆」

「戦いの方もやらないとね?」

さて、武器は……このドリルみたいな剣? かな。

なのははいつものようにビートクローザーを持っている。

「……ならさっさと終わらせる!」

香帆は背中の翼を広げて飛び、手に持っていた銃を乱射してくる。だけど甘いよ? 確か香帆は飛行魔法の適性が無かったから飛んだことがないはず。その証拠に空中で少しふらついたり、高度が低い。これならジャンプで届く!

ラビットの特性だと思われる強化された脚力で跳び、香帆の上をとって武器で叩き落とす。

そこをなのはが近づいてビートクローザーで攻撃していく。たまらずなのはを蹴り、後ろに下がった香帆は別のボトルを取り出し、タカと入れ換え再びレバーを回した。

《パンダー!》

《Are you Ready?》

新しく生成されたボディはその手に大きな爪がついている。香帆はその爪でなのはに攻撃して、もう片方の手に持つ銃で私を撃つてくる。

私も剣を銃モードに変えて撃ち返すけどシューター系魔法と勝手が違うからあまり当たらない。

さらに香帆は、今度はガトリングの方を別のボトルに変更した。

《ロケット!》

《Are you Ready?》

《ぶっ飛びモノトーン!》《ロケットパンダー!》

《Yeah!》

また変わった。今度は白の爪と空色の左手がロケットになった姿。そしてそのまま再びレバーを回していく。

エボルトのドライバーと同じなら何か来る!?

あ、私も同じの使ってるから回せば……そう思いなのはを見ると頷いてくれた。やりたいことは伝わっている、だったら!

私となのはもレバーを回していく。

《Ready go!》×3

《ボルテックファイニッシュ!》×2

《ドラゴニックファイニッシュ！》

香帆が飛んで、上から爪を勢いよく振り下ろしてきた。私たちはその場で軽く回転してエネルギーを纏った回し蹴りを同時に放つ。

私たち二人の必殺技は香帆の技を軽く凌駕し、大きく吹き飛ばして香帆の変身を解除させた。

……あれ？というか倒れた香帆が起き上がらないんだけど？変身を解除してなのはと一緒に香帆に近づくと目を回して気絶していた。もしかしなくてもやり過ぎた？

私たちはその後、皆に少しやり過ぎだと怒られ、香帆には自作だというコーヒーの試飲をすることで許された。ただ、あのコーヒー……もの凄く不味かったよ、香りは良かったのに……。流石に本人の前では言えなかったけど。

空白期の6

(??side)

どれくらいの間走っていただろう。元々いたあそこが何の施設かはわかっていない。だけど、あそこから逃げなきゃならないってのはわかった。

ある日、気付いたら知らない部屋のベッドに寝かされていて、起きたと思えばやたらとうるさい機械……新型のデバイスか?……のテストを赤い蛇の怪人にさせられた。俺の魔力なんてゴミレベルだから余り意味ないと思うんだがな……

それまではバイトでなんとか生活費を稼いでいたから、衣……は除くとして食住は割と良かったからそこでの実験に協力していた。

テストに関しては俺がテストさせられたのと同じ機械をつけた紫のスーツの野郎との戦闘訓練だったり、テストで機械から電気が流れたり、謎のガスを入れられたり、と苦しいことばかりだったが暇な時間も多かったのものでそれほどしんどくはなかった。

逃げ出す切っ掛けはほんとに偶然だった。暇だから与えられた部屋から出て施設をこっそり見ていると、数年前から現れるようになって怪物が作られていて、さらに他の人間が俺も入れられたガスを入れられてるのを見てたらそいつも怪物と化したのを見たからだ。

これはマズイと思い、隙について奴らにテストさせられていた物やそれに装填して使っていたボトル等をいくつか持って逃げ出した。外は夜な上に周囲は森で囲まれていた。方角なんて分からないから俺の勘に従って適当に走り出した。

例の怪物が追っ手として差し向けられたが、紫野郎との戦闘訓練で慣れたのもあり、持ち出したボトルを振って戦い、全部叩きのめした。

とにかく管理局に通報したいが……連絡手段が無いんだよな。後は怪物自体はそんなに強くねえが、紫野郎はとも強いから派遣された部隊によっちゃ返り討ちにされるだろうな……あの噂のエアースオブエース クラスじゃないときつそうだ。……つとあれは空港か。森を抜けると日は昇ってたが廃墟ばかりある区画だったからいつの

間にかここまで来てたんだな。

ん？空港？……もしかしくなくてもこれは管理局に助けを求められるチャンスか？

そう思った俺は疲労した体を動かして空港へと歩みを進めた。

(No side)

謎の青年が空港へと着いた数分後、その空港では大規模な火災が起きていた。

「だあああ！ついてねえー！」

青年も避難するために空港内から出口を探しながら火事から逃げている。初めて来た場所なのに加え、自分が入ってきた方から火の手が回って来ている為、出口が分からないのだ。ついでにパニックになったせいで他の人を見失ったというのものもある。

ドンツ！

「つと、ウオツ!？」

「キヤツ!？」

青年は唐突に角から出てきた紫髪の少女とぶつかった。

「ごめんなさい！あ、あの、スバルを……妹を見てないですか!？」

「え？あ、いや、悪い。見てないな……ってあんた、妹とはぐれたのか？」

「はい、火事のちよつと前にはぐれてしまって……早く見つけないと……」

この火事だ、早く見つけないと手遅れになってしまう。そう彼女は言いたいのだと青年は理解した。

「わかった。俺も……」

手伝う。そう言おうとしたところで青年と少女の付近で爆発が起き、壁が吹き飛んだ。そしてそこから一体の灰色のスマッシュユが歩いてきた。それは分厚い装甲を持ち巨大なパワーアームを持っている。見るからに格闘戦に強そうだ。

「ヒツ!？」

「チツ、こんなときに……嬢ちゃん、ここは俺に任せて逃げろ」

「え？だいたいわかりますけど何するつもりですか？」

「勿論あいつをぶん殴る。なあに、これでもあいつらは何体もこの拳で倒してきたんだ。だから任せな！」

そういつて青年は懐からフルボトルを取り出して振りつつ、灰色のスマツシユ……ストロングスマツシユハザードに殴りかかった。

一方、迷子のスバル少女はというと……

「グスン……お父さん……お姉ちゃん……」

燃え盛る炎の中、一人取り残されていた。

家族とはぐれた挙げ句、大火災に巻き込まれ一人寂しく孤立していた。さらに不運なことに、スバルの横の柱が折れ彼女に向けて倒れてきた。

「あ……」

スバルはそれに気付いたものの反応出来ず、その場に棒立ちになり、恐怖で目を瞑った。

しかし、いくら時間が経っても痛みが来ないのを不思議に思ったスバルが目を開けると、桜色の魔力で包まれ守られていた。さらに目の前にはその魔力の持ち主と思わしき、女の人が。

「もう大丈夫だから、安心して？」

名前は？」

「スバル……スバル・ナカジマです」

その女の人……高町なのは手に持つデバイス、レイジングハートを構え魔力を集めていく。レイジングハートからカートリッジが排出され、更に魔力が高まる。

「いくよ、デイバイン……バスター！」

桜色の砲撃が天井を突き破り青空を見せる。

その後、なのははスバルを抱え避難した人の集まる所へと連れていった。

そこでスバルを駆けつけた消防隊に預けると、はやてから念話が届いた。

『よっしゃ、こっちはいつでも消火の為の魔法いけるで。そっちはどうや？』

『ちよつと待つて！スマツシユがいるんだけど、これが強い上に要救助者がまだここに二名いるの！なのは、手伝って！』

『わかった！すぐ行く！』

なのははフェイトからの連絡を受けてすつとんでいった。

何があったのか時間を少し戻そう。

「オラア！」

懐から取り出した赤い鳥のような模様のあるボトルを振りつつこれまでのように倒そうと殴りかかる青年。だが……………

ガキン！

「あ？？」

何体ものクローンスマツシユを倒した拳が効いてないことに固まる。当然、それが隙になり青年は殴り飛ばされる。

「お兄さん！」

青年と一緒にいた少女……………ギンガが青年に近寄る。

「大丈夫だ。だからさっさと逃げろ……………」

ストロングスマツシユハザードも二人に近づいていく。青年は少しふらふらとしながらも立ちあがるが、これまでの疲労で膝をつく。

スマツシユが二人を叩き潰そうと腕を振りかぶった、その時。

『Arc saber』

金色の刃が飛来してきてスマツシユを怯ませ、金色の閃光がスマツ

シユと二人の間に割り込みスマツシユを蹴り飛ばす。

「大丈夫ですか？……ってそれフルボトル!？」

助けに入った金色の閃光……フェイトは二人に声をかけるも青年の手にあつたものに驚く。

が、詳しく話を聞く前にスマツシユが起き上がり再び近づいてくる。

「……後で話を聞かせて貰います」

『Zamber form』

ザンバーフォームにしたバルドイツシユを構えスマツシユと戦い始めるフェイト。

しかし、スマツシユの装甲は厚く、ザンバーフォームのバルドイツシユの刃が通らない。

「硬い……」

一方のスマツシユの攻撃も威力はあるが、フェイトのスピードに対応出来ていないため、お互いにダメージはない。

はやてから消火の用意が出来たとフェイトに念話が届くも、スマツシユと要救助者がまだ残っているため、待ってもらってなのはに応援を頼んだ。

しばらくスマツシユとフェイトの硬直状態が続いたところで、上から放たれた砲撃がスマツシユへと命中した。そこをフェイトがバルドイツシユを振り後退させる。

「なのは、遅いよ」

「ごめんね、フェイトちゃん。」

そつちの二人が要救助者かな？大丈夫？」

なのははギンガと青年を見て声をかける。

「あ、はい！でも妹とはぐれちゃって……スバルって言うんですけど……」

「スバルちゃん？もしかしてスバル・ナカジマっていう子かな？その子ならさつき助けて預けてきたから安心して」

それを聞いて安心するギンガと青年。だけどスマツシユがまだいるのですぐに気を引き締めた。

「さて、もう少しだけ待っててね。行こうか、フエイトちゃん」
「うん、そうだね。新しい力の初披露だね」

二人はビルドドライバーをつけ、それぞれのボトルを装填。レバーを回していく。

「二変身！」

《ラビットタンク！》《Yeah！》

《Get Cross-Z Dragon！》《Yeah！》

ビルドとクローズにそれぞれ変身した二人はドリルクラッシュヤーとビートクローザーを手に取り、スマッシュへと斬りかかる。

ガキン！

「えっ、嘘!？」

「これでも装甲を抜けないなんて……」

しかし、スマッシュに二人の攻撃は受け止められた。二人の攻撃を受け止めた腕を挙げて武器を弾き飛ばし、反応の少し遅れたなのはスマッシュの拳が綺麗に入った。

「キヤアアア!!」

「なのは！」

(フエイトside)

このスマッシュ、強い。何か手は……

「おい!そこの赤と青いの!」

へ?私?

要救助者の青年に呼ばれたので振り向くと

「これ!使えないか!？」

広げた掌にはいくつかのフルボトルが。

確か香帆がボトル変えて別の姿になってたよね……うん、やってみよう!

「借ります！」

《ハリネズミー!》《ダイヤモンド!》

……ベストマッチじゃない、別の組み合わせを試さないと。

香帆やすずかたち曰く一番相性のいいボトルを組み合わせるとベ

ストマツチになって高い性能を発揮できるって言ってたよね。

《ゴリラ!》《ロボット!》

これも違う!

《フェニックス!》《消防車!》

………違う!

私がベストマツチを探しているのを見たのはがスマツシユの足止めをしてきている。早く見つけないと!

《ゴリラ!》《ダイヤモンド!》

《ベストマツチ!》

やった!!

空白期の7

(フエイトside)

《ゴリラ!》《ダイヤモンド!》

《ベストマッチ!》

「ベストマッチキター!」

『sir !?』

つい、テンションが上がって叫んでしまった。バルディッシュに驚かれたけど反省はしていない!

私は即座にレバーを回して新たな装甲を作り出す。

《Are you Ready?》

「ビルドアップ!」

《輝きのデストロイヤー!》《ゴリラモンド!》

《Yeah!》

ゴリラモンドフォーム、茶色と水色の二色の装甲を持ち右手は巨大なナツクルになっている。仮面の内側にそれぞれのハーフボディの性能が表示されたのでさっと確認。これならいけると思う。

「なのは、下がって!二人をお願い!」

「うん!わかったよ、フエイトちゃん!」

なのはと入れ替り、スマッシュの相手をする。

スマッシュの巨腕での一撃をダイヤモンドハーフボディによるダイヤモンド変換能力で作りに出したダイヤモンドの盾で受け止める。そこを右腕のナツクル『サドンデストロイヤー』で殴り付ける。これにはパンチの威力を二倍にするという能力がある。ゴリラの高い攻撃力をさらに上昇させているため、それを受けたスマッシュがその場に踏ん張れるはずもなく、吹き飛んで地面を転がる。

トドメにレバーを回して必^{ホルテックファイニッシュ}殺 技の構えをとる。

スマッシュの周りをダイヤモンド化させ動きを阻害、右拳を構えて

……

《Ready go!》

《ホルテックファイニッシュ!》《Yeah!》

力いっぱいぶん殴る!

これを受けたスマッシュは倒れた後、動かなくなった。……あれ? いつもなら爆発して消滅するんだけど。もしかして……

私は六年ほど前に母さんがスマッシュにされた時にエボルトに渡された空のフルボトルを倒れているスマッシュに向ける。するとボトルに成分が吸収され、スマッシュにされていた人が元に戻った。母さんの時とは違いその人が死ぬことはないみたいで良かった。

この人と女の子を救助隊に預けた後、はやてが魔法で消火し、青年を連行する。とりあえず話を聞くのはあそこがいいよね。あそこなら広いしご飯はおいしいし。でも香帆のコーヒーは遠慮したいかな。はやてとも合流してあそこへと向かう。

(青年 side)

「お邪魔します」

「はい、いらつしやい。フェイトちゃんなのはちゃんにはやてちゃん……と、新しい人?」

俺が三人の局員の少女に連れてこられたのは一つの喫茶店。オーブンが来年四月になってるが入れるのか? というか事情聴取って普通、局でやるもんじゃないのか?

聞くと俺が関わった件は彼女たちが追っているもので、あいつらとまともに戦えるのも彼女たちくらいだと言う。専門の部隊がまだ無いため、協力者の所有する店(開店前)を仮の拠点としているらしい。

そして店に入って店員さんと思わしき女の人を見たとき、ズキーンツ! と来た。まさにフォーリン・ラブ! だが、俺はその気持ちを必死に隠す。ここで顔に出したりしたら確実に引かれる。ならば今はこの気持ちを抑え、しかるべき時に!」

「しかるべき時に、なんや?」

「えっ、声に出てた?」

「途中からおもつきし声出とったで。ミソラさんはなのはちゃんらと話して聞いてなかったようやけどな♪」

良かったなあ、と狸っぽい雰囲気少女にからかわれる。まさか、

バレた!?

「バレバレや、あんな顔してたら誰でもわかる……ごめん、訂正や。なのはちやんとフェイトちゃんは鈍感過ぎてたぶんわからんやろ」

まあ、頑張りや。と応援され、そのミソラさんという女性に話しかける狸少女。いくつか話した後、狸少女に手招きされたのでついていくと何故か冷蔵庫の前に。その扉を開け何か操作をしている。

すると、冷蔵庫の奥が開き地下へと続く階段が現れた。それに俺が驚いていると、ついてくるように言われた。階段を降りるととても広い地下室が。様々な機械や大きなテーブル、一人の少女が寝ているベッドが……つてこれは俺が見るとヤバいんじゃない?

「香帆、お客さん来てるから起きて?」

「ん、ん……! せっかく気持ちよく昼寝してたのに……!」

どうやら寝ていた子は昼寝していただけらしく服も普通の服だった。寝巻とかだと俺が(社会的に)死んでいたかもな。

「ま、というわけでようこそや! ファウスト対抗チームの基地(仮)へ!」

もしかしてファウストつてのがあいつらの名前か? だとしたら名前安直過ぎるだろ。

「はやてちゃん……その名前、やっぱりどうにかしない? そのまま過ぎるよ」

「うん、同感」

俺もそう思う。

「やかましいわ! なのはちやんの考えた亡国企業とかフェイトちゃんファントムタスクの考えたフィーネよりはましやろ! なんか敵っぽい名前やし!」

あー、うん。そのチーム名よりは……

「まあ、名前は今はどうでもええねん。先に色々聞かなあかんことあるからな。お兄さんも聞きたいことあるやろ?」

「ああ、そうだな。……えーと、」

「そういや、自己紹介まだやったな。私の名前は八神はやてや」

「フェイト・T・ハラオウンです」

「高町なのはです」

え、高町なのはって……

「エース・オブ・エース!？」

「にやはは、やっぱり有名なんだね……」

そりや、街頭で色々の記事になったりしてるしな。

「ところで、あの子は？」

俺はさっきまで寝ていた子を指差す。

「ああ、香帆ちゃんのことやな。彼女は協力者の一人でこの店のマスターやで。ちなみにミソラさんはここの居候や」

狸少女、改め八神が答えた。

あの子がマスター!?で、ミソラさんが居候……

「私らのことは答えたからお兄さんのことを教えてもらえるか？」

「ああ、俺はカズミ・サクライ。ミッド出身の21歳だ」

「ふむふむ、じゃあサクライさん。なんでフルボトル持ってたか聞いてもええか？」

「ああ、知ってることは全部話すぜ。」

実は……」

「ほうほう。なるほどな、次はこっちの情報やな。言えん部分もあるけどそこはかんにな」

お互いに持つてる情報を交換。

で、最後に奪ってきたあの機械を二つとゼリーみたいなのを机の上に置く。

「これって……」

「俺がテストさせられてたやつだ。お前らの話通りなら俺も変身して戦える可能性があるよな？」

「そうやな……香帆ちゃん、これの解析とサクライさんをしばらくここに置いてくれへんか？」

「わかったわ。じゃあ地球へ持っていくけどいい？」

「ん、構わへんよ」

「それと、サクライさん。一週間だけならここに泊めてあげるわ。はやて、それだけあればなんとかできるでしょう？」

「いけると思うで」

「じゃあ、任せたわよ」

そういうと香帆と呼ばれた少女は機械とゼリーみたいなものを持って出ていった。

というか……ここに泊まるってことは一週間ミソラさんと二人つきりなのか!? ヤバい、どうする。考えろ、考えるんだ。まずはアピールからか? いや、この気持ちを伝えるべきなのか!? どうする、どうすればいいんだー!!」

スパンツ!

「やかましいわ! だから心の声が漏れとるねん! ……選択間違えたかもな(ボソツ)」

「なのは、サクライさんはどうしたのかな?」

「さあ? 何処が悪いんじゃない?」

そんなこんなで俺は一週間ここに泊まることになり、その間にミソラさんと仲良くなることを目指すことにした。

p. s ミソラさんとは一週間で普通に話せる程度の仲にはなれました。

後、聖王教会なるところに連れていかれてその一時預かりになりました。

その後、しばらくして変身出来るようにもなったはいいが、高町とハラオウンとの模擬戦があらに暇さえあれば入り、毎回ボロボロになるまでやられる。たまに八神のところのシグナムってのも来て、これにも負ける。

……………俺っている?」

空白期の8

空港火災から半年近くが経ったとある日。

香帆が地球に持っていき、月村・バニングス両家の元で解析等を行っていたスクラッシュユドライバーとロボットスクラッシュユゼリーの詳細が分かったとの連絡が入り、なのはたち、対ファウストチーム一行は休暇を使い地球へと向かった。

(なのはside)

「さて、それじゃあ説明を始めるわよ」

すずかちゃん家に集まった私たちの前に忍さんが立ち、画像をモニターに出して話し始めた。

「まずはこのロボットスクラッシュユゼリーね。」

ロボットスクラッシュユゼリーはロボットフルボトルの成分を濃縮、ゲル状にして封入されていて、そのせいか秘められたエネルギーはフルボトルよりも大きいみたいなのよ。

そして、それを使うためのものがこっちのスクラッシュユドライバーね。

……私的にはこれは使うのを余りオススメしないわ」

え？なんで？

「理由としてはいくつもあるわ

まず、変身の段階で普通の人間じゃ耐えられないほどの負荷がかかること。仮に耐えれて変身してもまともに動けないでしょうね。それこそその場で消滅してもおかしくないわ」

なるほど。……って、あれ？そういえば、

「あのお、以前アリシアちゃんがそれ使って変身して戦ってたんですけど。それだと説明がつかないと思います」

「ああ、紫野郎が使ってたし、俺も実験させられたが耐えられないほどじゃなかったぜ？」

私とカズミくんの疑問を聞いて忍さんは……

「ええ、そこで重要だと思われるのが、ネビユラガスというものよ。フエイトちゃんが昔スタークに吹き付けられたもの、ネビユラガスって言うってたわよね？それがなのはちやんと、話を聞く限りカズミくんにも入れられてると思うの」

そこから忍さんの私見や推測を含む解説が長く続いたので纏めると。

・ハザードレベル⇨ネビユラガスとの適合率。

・これまでのデータより、ハザードレベルが上昇するほど、戦闘能力を始めとする様々な身体能力が上昇する。なお、ハザードレベルに関してはスターク（エボルト）が数値を言っただけなのであくまでも推測の域を出ない。

・よってスクラッシュドライバ等ライダーシステムを使用するには高いハザードレベルが必要だと思われる。現に、クローズドラゴンやビルドドライバは使用するのに3.0以上のハザードレベルを要求されている。

「なるほどな……どうやったらそのハザードレベルってのは上がるんだ？」

「あ、それなら戦闘することによって上がったから訓練とかでも上がるんじゃないかな？体を鍛えるのと同じ要領で上がると思うよ」

カズミくんの質問に私が答える。まあ、あくまで予想なんだけど。

「でもそのネビユラガスって謎だよな。エボルトは人の潜在能力を引き出すものって言ってたけど……どこまで本当なのかな？」

「そうね……さっきも言った通り、データからはその通りだと推測出来なくはないんだけどハッキリと言いつけることは出来ないのよね……」

例えば、なのはちゃん撃墜事件。あの時負った怪我だと本来は生きてること自体が奇跡よ。それに魔法を使うのに必要なリンカーコアも大きなダメージを受けていて、復帰の見込みはほぼなかった。それ

なのに、なのはちゃんは無事に目覚めるどころか今のようによい後遺症もなく普通に生活している。なのはちゃんがリハビリを頑張った結果とも言えなくはないからネビュラガスとの関連づけるには少し微妙なのよね」

「うーん、よくわからないね。それにしてもなんでエボルトは敵に塩を送るようなことをしたんだらう?」

フェイトのその言葉にみんなが考え込む。

「考えても分からねえなら後回しにしようぜ。それよりもスクラツシユドライバーをオススメしない理由。他にもあるんだらう?」

「え、ええ。そうね。」

これも解析の結果分かったことなんだけど、スクラツシユドライバーにはアドレナリンを強制的に分泌させるようなシステムが組み込まれているの。つまりは擬似的に興奮状態にさせて戦いを促す……って感じかしら。最悪暴走しかねないわ」

「……俺はそれを使わせてもらうぜ。それを使えばあいつらに勝てるんだらう?」

「勝てるかどうかは言い切れないけど同じステージには立てるんじゃないかしら」

その後もしばらく話し合いが続き、カズミくんがスクラツシユドライバーを使うことに。さらにはロボットスクラツシユゼリーを元にも他の濃縮出来ないか調べてみたところ、私のドラゴンフルボトルが対応していることがわかった。だから一旦預けて作ってもらうことにした。幸いにもスクラツシユドライバーは二つあるし、もしもの時の切り札として持つことにした。

その間に私たちは息抜きとして、翠屋に行くことに。

そこで香帆ちゃんの従妹だという亜里沙ちゃんと会った。……着ていた服が白地に I a m 姉妹 L O V E とデカデカとプリントされていたダサイ服だったけど。

一緒に来ていた香帆ちゃんは少し顔をひきつらせていた。うん、あんな服を着ているのが親類だつてのはちよつとね……私もお姉ちゃ

んとかがそんな服着てたらと思うと……ね。

あと、フエイトちゃんはその亜里沙ちゃんにどこか懐かしさを感じたって言ってたけどどういふことだろう？ 本人もなんでか分からな
いって言ってたし。

その後、製造されたドラゴンスクラッシュユゼリーとスクラッシュド
ライバーを受け取って解散となった。

さて、ミッドに戻ったらカズミくんを鍛えないとね。私たちも特訓
しなきゃならないし、仕事もあるしで大変だけどなんとかしなきゃ。
エボルトたちに勝つには少しくらい無茶しないとダメだよね？

Strikers list

(はやてside)

今日は待ちに待った、機動六課のスタートの日や。

ラインと一緒に駆け回って有望な新人も何人かスカウトしてきたし、私の夢のスタートでもある！

……設立するのにあたって、上からはエボルト関連の事件も担当すること、つて条件も付けられたけどな。

まあ、これはなのはちゃんとフェイトちゃんがヤル気出してるし、技術面でも支援してもらってたから元からやるつもりやったしな。

部隊としてはロストロギア担当がヴィータ率いるスターズとシグナム率いるライトニング。エボルトたちファウスト担当がなのはちゃん、フェイトちゃん、カズミくんの三人で構成されたライダーズや。ファウストが出てこない限りはライダーズはスターズとライトニングの援護が仕事。

後は、何故かマスターのコーヒーだけが不味い喫茶店として(いろいろな意味で)有名になった喫茶店nascitaのマスターの香帆ちゃんや、地球で大学に通ってる囑託魔導師の遠坂胡桃ちゃんと衛宮剣太くんたちが外部協力者として登録されてある。すずかちゃんとアリサちゃんも支援をしてくれてるし、友達様々やな。

さて、それじゃあ時間やな。気を引き締めないとあかんな。

(スバルside)

「皆さん、おはようございます。私がこの機動六課の総隊長の八神はやてです。」

この機動六課は主にロストロギアの確保を目的とした部隊です。当然、中には危険物も含まれます。安全第一を心掛けてください」

今、話をしているのは私が所属することになった機動六課の総隊長、八神はやてさん。私と親友のティアはこの人に直々にスカウトされてこの隊に入ることになった。ティアはお兄さんの夢だった執務

官になるために、私は憧れの高町なのはさんと一緒に働くために。

「ただ、本局からの指示で近年巷を騒がしている怪物。正式名称をスマツシユと言いますが、それを産み出しているという組織の事件も私たちの担当となっています。ロストロギア確保の際に遭遇した場合、は即座に、私か高町なのは教導官かフェイト・T・ハラオウン執務官へと連絡してください。最近はAMFを発生させるスマツシユも現れて来ているので十分に気を付けてください」

へー、そんなのがいるんだ。

「スバルの馬鹿、絶対内容理解してないわね……」

私の隣でティアがなんか呟いてる。話はちゃんと聞かないとダメだよ？

「それでは、これで機動六課の発足式を終わります。各々自身の持ち場へ移動してください」

式も終わったので、私とティアは訓練場へと移動する。

そこで、エリオとキャロ、キャロの使い魔？それともペット？のドラゴンのフリードと知り合った。二人は緊張していたけど同じフワードってことですぐに打ち解けた。そこに一人の男の人が歩いて来た。

「ん？俺が最後か」

どちら様？

そんな私たちの疑問に答えるかのようにその人は語った。

「俺はカズミ・サクライ。歳は25とお前らより上だが気にせず気軽に話してくれ。なんならカズミンって呼んでくれてもいいぜ？」

あ、なんか仲良くなれそう。そんな気がする。

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします」

「エリオ・モンディアルです！」

「キャロ・ル・ルシエです。こっちは相方のフリード」

「キユクルー！」

「スバル・ナカジマです！よろしく！」

「ああ、よろしく頼む」

軽く自己紹介した後、二人の女の人が歩いてきた。しかもそのうち

の一人が！

「よし、全員揃ってるみたいだな。アタシはヴィータ。お前らの教導担当でスターズ分隊の隊長だ」

「知ってると思うけど私は高町なのは。ヴィータちゃんと同じく教導を担当するよ」

やった！なのはさんに直接教えてもらえるなんて！

「さて、そんじゃあまずはお前らがどれだけ出来るか見せてもらおうぞ」「ここですか？」

ここは何もないただの広場。本当にここでやるのかとティアが聞く。

「そうだよ。ちよつと待っててね？」

なのはさんが誰かに通信を送ってしばらくすると……

辺りが街中のようなビル群となった。どうやら最新式のシミュレーターらしい。

そして複数の機械が浮いていて、何体かの怪物もいる。

「あれが、六課が基本的に相手するであろう敵だ。浮いてるのがガジェット、陸にいる怪物がスマッシュだ」

「五分後に始めるから軽く作戦でもたてるといいよ。途中から私とヴィータちゃんも参戦するからね」

そう言つて二人は少し離れたところまで行った。

「さて、それじゃあ作戦をたてましょう。初めにあなたたちの得意なことを教えてちょうだい」

私は銃による中距離戦ね」

ティアがリーダー気取りで聞いていく。

「私はこの拳での近接だよ！」

「えーと、私は支援です」

「僕は槍での近接です」

「俺は……雑魚スマッシュ程度なら素手で倒せる」

「え、あのスマッシュを素手でですか？」

「ああ」

ティアが驚いてるけど、凄いの？

「それなら、とりあえずは馬鹿スバルとカズミさんが前衛、キャロが後衛でエリオと私が中衛ってことでいいかしら？後は途中で適宜動きましよう」

無視された!?いつもなら説明してくれるのに!

これが終わったらなのはさんに泣きついてやる〜

「よし、それじゃあそろそろ始めるぞ。配置につけ」

ヴェータ隊長から声がかかったので、最初に決めた通り前が出る。横にいるカズミさんはバリアジャケットを展開してないみたいだけどいいのかな?

「それじゃあ……始め!」